誰が為のoverture

茅野春葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰が為のｏｖｅｒｔｕｒｅ

【Ｎコード】
Ｎ４５６９Ｋ

【作者名】
茅野春葵

【あらすじ】
見知らぬ少年に突如『死んだ』と告げられた結歌。それにプラスして異世界の魂だ、世界のルールだと言われ納得しないまま、生まれ変わり、馴染みない世界で一からすべてをはじめる。納得しようがしまいが、生まれてしまったものは諦めて生きていくしかない。頑張るしかないかと、異世界で生きていく事を決意する彼女のお話。
頑張っていこうと思っているわりに、ゆっくりゆるやかな日常ライフ。

＊＊王道展開、主人公至上主義の傾向があります。

◆00

それは、世界の何処かに在った。
そう、確かに在る筈なのに世界からまるで切り離されているかのようにポツンと、暗く、光の射さない部屋が一つ。
自然光でも人光でも微かなりともありそうだが在るべき光源はどこにもなく、その部屋を支配しているのはただ闇黒のみ。
そんな部屋に誰も居るはずはないと思われたのに、そこに一人の男が居た。
いや――在った、と言うべきか。
部屋の闇に溶け込むかのように、それでも溶け込むことなく自身の存在を強烈な程世界に知らしめているかの様な男。
闇と相反する程の強烈な存在感なのに、闇と同化していてもなんら違和感を感じない。
そんな何とも言い難い雰囲気を纏った男は、ただ一人その闇の中に居た。
何をするでもなく、ただ一人闇黒が支配する部屋に。
光源が皆無な状況だというのに何故かおぼろげながら重厚な造りと分かる椅子に、気だるそうに頬杖をついて座っていた。
顔には何の表情も浮かべておらず、その瞳は何かを映している様で、何も映していない。
微塵も動きがみれず、ともすれば精巧な造りの人形かと思われた男が、言葉を発した。

「そうか、見付かったか」

誰かへの問いかけのようで、だが男の眼前には何者の姿も、存在すらも、ない。
だが確かに男は、誰かと会話をいや、意識を、思考を交わしていた。

そんな中、意識せずに出た言葉だったに違いない。
光源のない闇に支配された部屋で、男の表情など分かるはずもないのに男が笑った事が分かった。
それほどまでに、男の心を動かしたものだったのだろう。
姿の見えないものとの意識交感は。
男の笑みと同時に震撼した――世界が。
その震えは、歓喜なのかそれとも――恐怖なのか。
推し量る事は出来ない。

「遅かったと言うべきか、早かったと言うべきか。まぁいい」

くつくつと男の笑い声が木霊する。
心底嬉しくて仕方がないという雰囲気を醸し出しているのに、その中に垣間見える仄暗さがどうしようもなく違和感を感じた。
だが、それを指摘するものは生憎と此処にはいない。

「どうした。何を躊躇っている？」

先程までの笑いは瞬時に消え去り、眉間に皺を寄せると男は誰かに問うた。

「一時の仮初の死だ。何故躊躇う必要などある」

だが、男が思い描いていた答えは返ってこなかったようだ。
眉間の皺は自然と更に深くなる。

「お前のその優しさと勘違いしている偽善が、このような状況を生んだという事にまだ気付かないのか」

その言葉に相手は何か言い返したのだろう。

男は口角を上げると、明らかな嘲笑を浮かべた。
「お前がどう思おうと、何と言い訳をしようと既に遅い。
歪み、止まった時の歯車は動き出した。それを止める事は誰にも出来ん。
お前でも俺でも、そして――世界ですらも、な」

その言葉を最後に、男は口を閉ざした。
意思の交感をしていた相手との会話が終わったのか、それともこれ以上会話をする必要性が見出せなかったのか。
どういった理由にしろ、その事実は変わらない。
男は椅子から立ち上がると、歩き出した。
ただ真っ直ぐに。
明かりも無いというのにその足取りはふらつく事も迷いも無く、ある場所を目指しているようだった。
そして立ち止まると、手を前へと突き出した。

――ギギギッ・・・・・・

まるで、酷く錆付いた重い扉が開く様な音が聞こえた。
どうやらそれは間違いではなかった。
その音と共に、闇に支配された部屋に光が差し込んだのだ。
闇に支配された世界に侵食するが如く、光が強まり、広がる。
今までほぼ闇と同化していた筈の男は、躊躇う事無く光溢れる世界へと一歩を踏み出した。
男の存在を相反する、光に満ちた世界へと。
そして、身体全てを光の中へと滑り込ませる前に一度だけ、振り返った。
誰も存在していない、闇黒が支配する部屋へと。
その視線は部屋の中央へと向けられていたが、それは時間にしてほ

んの瞬き程度だった。
そんな少しの間の為に、態々立ち止まり振り返る意味など普通はない。
だが、男には必要な事だった。
男は部屋を通して、別のモノを見ていたのだ。
それが一体何かなんていう事は本人以外には、分からない。
その何かを意識として認識したからか、男は一瞬だけ表情を崩した。
それは歓喜の様で悲しみの様で、嘲笑の様で。
全ての感情が綯い交ぜになったものだった。
男は何事も無かったように表情を消し去ると、顔を前へと戻す。
そして二度と振り返る事無く、光溢れる世界へと進んで行った。
身体は光を全身に浴び、その姿は白光に包まれて掻き消えていく。
男が消えると同時に、もう用が無いとでも言うように先程と同じように音を立てて扉が閉まっていく。
風も無いのに重い音を立て、ひとりでに。
完全に扉が閉まると、勿論光は消え去る。
その場所に残ったのは主を失った部屋。
音も光も無く、ただ闇黒があるだけの。
そして部屋はまるで闇に同化するように、徐々に消えていく。
主を失った事で、存在すらする必要が無いとでも言う様に。
部屋も消え去った後、そこにはもう何も無い。
ただ闇だけがひっそりとその場所に留まっていた。

◆００（後書き）

更新はまったりペースとなります。
気長にお付き合いしてくださるとありがたいです。

◆1―1

気が付くと、真っ暗だった。
自分の周りにはただ闇だけがあった。
――いや、闇だけしかなかった。
もしかしたら見逃しているだけかもしれないと、右を見ても左を見てもただ闇が広がるだけで何も見えない。
明かりがない。光が存在していない。
それでも諦める事が出来ず目を凝らそうとして、おかしい事に気付いた。
目が開かないのだ。
開けていたと思っていた、開けて視界を埋め尽くしているのは闇だと思った。
だが、目が開かない以上その闇は自分がもたらしたものなのだと分かった。
瞼が開かないと、強烈な光以外は認識する事が難しい。
だから闇しか感じる事ができないのだ。
どうして目が開かない？
半ばパニックに陥りそうになる思考を、どうにか冷静に持っていこうとした。
そして何とか落ち着こうと、深く深呼吸をする事にした。
完全に冷静になれるわけではないが、それでも若干の落ち着きは取り戻せる。
だから深呼吸を、と――そこでまた違和感に囚われる。
手足が自由に動かない。
縛られているわけではない、それは感覚でさすがに分かる。
それなのに動かない。
目が見えない以上、自身の現状を確認する事は視覚ではできない。

出来る方法といえば唯一つ。

――感じとる事だけだ。

ならば、その方法を試すしか無いだろう。
やった事がないが、だからと言ってやらないわけにはいかない。
今のところそれしか思い付かないのだから。
それだけが、現状の確認を出来るものなのだから。

――全神経を自分の周りへと向ける。

目が開かないから、その点に関しては集中しやすいかもしれない。
果たして、何処までその感覚が信用できるのか。
それ以前に本当に、感覚で判断出来るものなのか。
疑問は尽きやしない。
それでもやるしかない、自分を信じるまでだ。
信じるってなんだ？なんて思いが一瞬頭を掠める。
そして思わず鼻で笑ってしまった。
未だ嘗て、そんなふうに考えた事はない。
人は切羽詰れば柄にも無い事を考え容易く受け入れてしまうのかもしれないなと、人事のように思ってしまった。
そんな思いを頭の片隅に押しやりながら、手足が自由に動けば触感という手も使えたのにとチラリと考えてしまうのは仕方がない事だろう。
こんな事をつらつらと考える余裕があるんだな、なんて思いつつ集中に専念する。
――音は聞こえない。光も多分ない。そして風も無い。
空気の動きも感じられない。
考えられるとすれば、密室？何かの箱の中？
私の身体は・・・・・・。

何かに包まれている？
身体中に冷たい感覚はない。そして硬い感触も無い。
少なくとも床の上にそのまま放置されているわけではないらしい。
どういう事だ？
身体を何かで拘束されているわけではなく、それでも自由を奪われ
尚且つ、音も風も光も遮断するような場所に閉じ込められている。
――監禁。
そんな言葉がチラリと頭を掠めた。
そして言葉を認識すると同時にじわじわと、心を侵食していく。
今まで冷静さを保っていた思考は容易く崩壊をし、坂道を転がるよ
うに恐慌へと切り替わった。
一体自分の身に何が起きている？
誰がこんな事をした？
目的は一体なんなの！？
この状況を、疑問を、誰に問いかければいいのか？
生憎と今現在、自分の周辺には人の気配がしない。
人を閉じ込めるだけ閉じ込めて、放置したのか？
それによって齎される結果は――衰弱死。
そんな事を考えると、死の足音が聞こえてくる気がする。
すぐ傍で死神が、鎌首を擡げている様な幻まで見えてくるような気
がするからなんだかおかしくなった。
目が開かないのに、幻？
そんなの意識下での出来事じゃないか、全て。
恐慌状態の中でそんな事を考える自分に思わず笑いが零れた。
きっと今の心理状況は、狂う一歩手前なんじゃないだろうかなんて、
人事のように分析している自分がいる。
分からない、分からない事が多すぎる。
半ばやけになりながら、無駄だと知りつつも手足をばたつかせた。
全く動かないと思っていたのに意外と動いたな、なんて頭の片隅で
思った。

その時に足が何かに当たる。
恐慌状態ながらもそれは分かった。
どうやらその事が、心をほんの少し静める効果を齎したらしい。
私はその何かを確かめるべく再度、足をばたつかせた。
思いのほかその何かは近くにあるようで、簡単に足に当たった。
感触としては柔らかく、弾力がある。
だがそれが何かなんて事は感触からは、残念な事に分からない。
目が開かないから、見えないからそれが何なんて事は確かめる事は出来ない。
ただ、硬くない事から蹴破れるのだろうか？
先程の感触を思い出しながら、やってみようかと思った。
思って再度足をバタつかせ様とした時だった。

――トントン

まるで労わる様に、慰めるようにリズムを伴って送られてくる振動。
なんだろう、これは？
自分の身体に直接ではなく、自身の周囲から伝わってくるようだった。
定期的に与えられる振動と同時に、温かい気持ちが自分の中へと流れ込んでくる。
普通に考えれば、そんなものが流れ込んでくる筈も無いのに。
それでも確かに、自分の心に直接温かい気持ちが流れ込んできていると分かる。
振動が、トクントクンと自身の心音と連動するかのように。
先程までのパニックに囚われていた思考が、徐々に冷静さを取り戻していく。
それは偏に、この労わるような振動と何処からか流れ込んでくる温かい気持ちのおかげだろう。
冷静さを取り戻して今から考える事があるのに、まるでリズムを取

って送られてくる振動と、温かい気持ちに触発されたのか。
それとも張り詰めていた気が、突如緩んだせいなのか。
意識が混濁していく、そのまま闇へと深く沈み込んでいきそうになる。
要するに、睡魔に負けそうだという事だ。
抗えるなら抗えるべきだと思う心と、現実から目を背けたいという心。
軍配はどうやら後者に上がるらしい。
そう思ったのが最後だった。
私の意識は、暗く深い闇に沈みこんだ。
逃げ込んだ眠りという先が、仕組まれたもので。
尚且つ、自分の現状を説明してくれるものだったなんていうのは当たり前だが、この時の私には知る由もなかった。

◆1―2

そこは白い空間だった。
さっきまでの真っ暗な世界とは間逆の。
何も見えないよりは幾分マシだとしても、白い空間としか言いようのない場所もどうかと思う。
ああ、それにプラスして身体は自由に動かせるみたいだから現状としては大分マシだと修正をしておこう。
しかし・・・・・・。
真っ白いだけで、何もない空間というのは現実味が無い。
勿論、真っ暗で身体の自由が利かないというのも現実味が無いが。
そう考えると――夢、なのだろうか？
さっきも、今も。
だとしたら、納得がいく。
いや、これ以上に納得がいく答えなんかある筈が無い。
あってたまるか。
うん、絶対認めない！
私は一人納得――強引に自身に言い聞かせると、改めて周りに視線を向ける。
人工物も自然も生き物も、植物も・・・・・・。
生命を感じさせる僅かなものすらない。――空や土や風や匂いすらも。
ただ、『白』だけが支配している世界なのだ。

「ほんっとう、何にもないよねぇ・・・・・・」

思わず声に出して呟いてみたが、その声は反響する事無くそのまま消えた。
反響しないという事は、だだっ広い空間――で、あってるのよね？

念の為にと、手を前後左右に出して障害物が何もないかを確認する事にした。
確かに視界には何も映ってないけど、それが真実かどうかなんて分からない。
疑心暗鬼と言うことなかれ。
既にこの白い空間自体がおかしいのだから、念には念を入れて確認する方が今後の為にというか私の精神衛生上、重要な事だ。
よしっ！　と、無駄に気合を入れてまず始めに前へと手を伸ばした。
うん、何も無い。
その状態のまま横へと動かす。
そして最後は、後ろ。
上下に腕を振っても何にも当たらなかった。
間違いなく周辺には何もないって事だよね。
ふーっと、安堵の息を出した。
そんな大した事をしたわけでもないけど、なんだか一気に疲れが出た感じがする。
これは所謂精神的疲労ってやつだろうなぁ。なんて事をつらつらと考える。

「しっかし、これって何時になったら目が覚めるんだろう？」

何も無い白い空間に、一人ポツンと居たって何をすればいいのか皆目検討がつかない。
それ以前に目が覚めるまでどうやって過ごせばいいのやら・・・・・・。
とりあえず、ボーっとしているしかないのだろうか？

「ある意味目が覚めていると思うよ？」

声は突然聞こえた。

勿論、私が喋っているわけではない。
――さっきまで人、居なかったよ、ね？
ただ白い空間が広がるばかりで、人工物や自然や生命体が居ない事はついさっき確認したばかりだった。
なのに行き成り声が、あろう事か話しかけられているこの状況は一体？
これも夢だ、夢のなせる業だ！と、自分に言い聞かせる。
バクバクと忙しなく自己主張を始める自身の心臓に『落ち着けー、落ち着けー』と呪文のように心の中で数回繰り返す。
そしてゆっくりと、声が聞こえた方へと顔を向けた。
その際、首が『ギギギギ・・・・・・』なんて音が聞こえてきそうな程、不自然な動きになっていたが今はとりあえず気にしないでおく。
何せそんな事に気を廻しておける状況ではない。
念の為にと最悪の事態を想定して、身体は何時でも走れるように準備だけする。
振り向いた先に居るのは人か、それとも人外のモノなのだろうか？
願わくば、振り向いた瞬間『パクリ』なんて事になりませんように。
半ば緊張した面持ちで振り向いた先に居たのは――少年だった。
年の頃では十三、四歳前後と言ったところだろうか？
少し肌の色が白い、全体的に細身の男の子。
病弱なのかもしれないなと、一人推測しつつもそれを声に出す事はしない。
本人が気にしている事かもしれないからだ。
身長はどうやら不本意ながら私と同じぐらいらしい。
確かに私自身世間的な平均身長よりちょっと小さいかなとは思っているが、何も目の前の少年と同じじゃなくてもいいだろうと思う。
ううっ。
自分で自分にダメージを与えてしまった。
思わず項垂れてしまう。

少年は勿論私の精神ダメージなんかに気付くはずもなく、行き成り頭を垂れた私を不思議そうにただキョトンとした表情で見ていた。
ああっ！　明らかに挙動不審でしょう。
頭を掻き毟りたい衝動を抑えながら、再度少年観察を開始した。
顔はまだ大人に成りきれていない。だからこそ自分の中で『少年』と位置付けたわけなんだけど。
いやー、ごめん。
単なる少年じゃなかったね。大事な一言忘れてたよ。
『美』少年でした。――美少年。それも外国の。
アジア系じゃなく、欧米とか北欧とか欧州とか・・・・・・アッチ系です、所謂。
どうして欧米とか欧州の子供達ってあんな可愛らしいんだろうね。
本当。
アジア系の子供でも可愛らしい子はいるけど、外国に比べると少ないとは思う。
あくまでも個人的見解だけど。
――目、鼻、口は均整が取れており外国人らしく、のっぺりとした顔ではなく彫の深い顔。
パッチリとした大きな目にくっきりとした二重、お人形さんか！？
　と思わず突っ込みたくなる程綺麗にカールされている睫。
肌にはシミ一つなく、桜色に色付いたぽってりとした柔らかそうな唇。
特筆すべきは、ちょっと特殊な髪と目の色だけど・・・・・・。
赤って言うか、少しくすんだ・・・・・・、色落ちした赤――退紅（たいこう）色（しょく）の髪と瞳。
普通に考えれば浮いてしまいそうになる色合いなのに、それが違和感なく似合っている。
いや、この色合い以外は合わないんじゃないだろうかと思うほど少年の造詣にピッタリなのだ。
こんな自己主張の激しい色を、全く違和感感じさせないなんて相当

凄いと思う。
申し訳ないけど、まじまじと見させていただきました。
私の視線を少年が不快に感じてなければいいんだけど・・・・・・。
これに長髪のカツラでも被ってスカート穿けば完全な美少女になるんだろうなぁと、思わず想像してしまった。
羨ましいというか、なんというか・・・・・・。
想像なのに、感嘆のため息が一つ自然と零れ出た。
全てにおいて人並みな私から見ると羨ましいところだらけなんだけど、それに間違いなく付随してくるであろう嫌な事を考えると一概に羨ましいとも思えなくなる。
それなりの年数を生きていると、嫌なところまで気をまわしてしまうというか、ねぇ？
なんて、誰に問いかけているわけでもないのに心の中で相槌を一つ打った。

「僕の声、聞こえてるよね？」

私が心の中で一人会話劇場を繰り広げていると、聞こえていないかもしれないと不安になったのか再度声をかけてきた。

「ええ、聞こえているわよ」

さすがにそのまま言葉を返さないのは、大人として駄目だろうと思い返事をした。
少年――もう『美』を付けなくても少年が美少年だと分かっているので、今からは『少年』とだけにさせてもらおう。
だってそんな『美』ばっかり強調していると、なんだか自分が居た堪れなくなるというか、悲しくなるというか・・・・・・。
ま、まぁ大人の事情ですよ、大人の！！
なんて誰に言い訳しているんだろう私は。

とりあえず、目の前の少年が何者かなんて疑問は尽きないけど、会話をしてみるしかない。
願わくば、まともな人間でありますようにと、心の中で祈っておく。
少年は私の心の中の葛藤に気付く事もなく、会話を続けた。

「良かった。さすがにこのままの状態で送り出すのは後々大変だろうから、説明できるうちにしたかったんだよね」

　世間話でもするように、さらりと告げられた言葉。
その言葉に思わず私は眉根を寄せた。
ん？　どういう事だ？
少年の言葉の意味――勿論文章としての意味は分かるけど、それが指し示すものが分からない。
送り出す？　誰を？　私を？　何処に？　何処から？
いくら夢だからってさ、もう少し見ている本人に優しいものにならないんだろうか。
こう、次から次へとわけの分からない事の連続で、しかも謎の言葉を告げられてさ。
一体私にどうしろというんだ！？
癇癪を起こしたい気持ちを無理やり押さえつけると、少年へと問いかけた。

「君が何を言っているのか全然分からないんだけど？」

　大人な対応をと思っていたはずなのに、出たきた言葉は些か険があるものだった。
しかし少年は怯む事もなく逆に、「それもそうだよね」なんて一人納得する始末。
一体どっちの方が大人なんだと思わず自己嫌悪に陥りそうになっていた私に、少年はとんでもない爆弾発言をかましてくれたのだった。

「椎名結歌（しいなゆいか）。君はすでに死んでいるんだ」

◆1―3

・・・・・・は？
確かに椎名結歌（しいなゆいか）は私の名前だけど。
死んでる？　誰が？　私が？
行き成り何言ってるんだ、この少年は？
冗談にしてはかなり悪質だと思う。
そして私！！
なんで夢なのに、こんなとんでもないものを見てるのよ！？
見るならもっと楽しいものにしようよ！！
そんな一人永遠突っ込みループに入りそうな私に、少年は大きなため息を一つ吐きつつ言った。
おかげで無限ループにはまらずにすんだけど・・・・・・。

「やっぱり、信じてないんだ」
「いや、信じるも何も。信じる証拠もないし？　それに死ぬような病気にも事故にも巻き込まれた記憶はないし。
第一これ・・・・・・。夢でしょ？」

果たして『夢』と宣言していいものか迷ったものの、言った事で覚めればよし。そうでなくても特に問題はないだろうと思った。
そんな私の言葉を予想していたのか、それともただ単にマイペースなのか、少年は反論する事もなく淡々と言葉を紡いだ。
その内容は明らかに先程までの会話とは何ら脈絡はなかった。

「椎名結歌（しいなゆいか）。享年二十三歳。いや、数えで言えば二十四歳？　日本ってなんだかめんどくさいね。まぁいいけど。
家族構成、父母弟の四人暮らし。弟とは八歳離れていて、家族の持ち家に同居している。地元の短大を卒業後、地元の中小企業に就

職。
職種は・・・・・・。この際いらないよね？　社歴三年目で、現在彼氏なし――というより、今まで彼氏なしに訂正してた方がいいよね？
あとは・・・・・・」
「わーっ！！　ちょ、ちょっと！！　何言ってるのよっ！！」
思わず叫び声を上げ、少年の言葉を遮った。
何せ少年がすらすらと言い出したのは、完全に私のパーソナルデータ。
一体どうやって！？　っていうか、個人情報の漏洩でしょ！！　なんて続けざまに叫びたくなったけど、よく考えればこれは夢なわけで。
しかも、自分で見てるんだから自分の情報なんか全て取り出し自由。個人情報の漏洩で訴える事なんか出来るわけない。
一体なんていう夢見てるんだよ、本当。
これの夢診断、起きて覚えてたら絶対やってやるんだから！！
そうとでも思わないと居た堪れない・・・・・・。
一人自己嫌悪に陥りそうな私に対して、少年は少しも悪びれる事無くそれどころかどうして止めるのかと不思議そうに私を見た。
「何って・・・・・・。君が死んだという事を納得しないから、とりあえず君の生い立ちでも言って信じてもらおうかなって」
「いやいやいや。自分の夢だったら自分の事を知っているのが当たり前だから、信じる理由になんてならないわよ。
それにそんな事を言うよりも、死因？　それを告げてもらった方が遙かに説得力はあるとは思うけど？」
そんな私の言葉に少年は「頑固だなぁ」とボソリと呟いた。
あの、聞こえてるんですけど？

それとも、聞こえるように態と言ったの？
少年の呟きに些かムッとしたものの、そこで反論するのも大人気ない気がしてとりあえず聞こえてない振りをする事にした。
「どうあっても夢だって言い続けるわけなんだ？」
「いや、だからね・・・・・・」

言葉の端々に『頑固』という思いが含まれていると感じるのは、私の被害妄想なのだろうか？
兎角すれば引きつってしまいそうになる頬をなんとか押さえ込みつつ、『私は大人、私は大人』とまるで呪文のように心の中で数回唱えた。
表情が少し強張ってしまっているかもしれないが、それはこの際気にしない。
そんな事よりも、だ。
少年の言葉からも考えるまでもなく、結局この会話は平行線のまま。
少年はどうあっても自分の意見を曲げる気はないらしい。
自分の事を棚に上げて、私を『頑固』呼ばわりか。
一体どっちが頑固だって言うんだよ。
思わず悪態をついてしまいたくなる。
ここでそれを指摘しても、不毛な会話しか出来ないだろうから黙っておくけど・・・・・・。
だからと言って私だって、自分の意見を曲げる気はない。
だって曲げてしまったら、私が『死んだ』という事実を認める事になるのだから。
例え夢だとしても、いや夢だからこそなのか？　認める気になんてなれない。
そんな私の態度に少年は何かを決意したような表情を浮かべた。
「本当なら、意思の疎通ぐらいちゃんとしたかったんだけど・・・・

・・・。

時間もないし、仕方ないか」

何やら自己完結しようとしている少年。
その言葉は、独り言のようなものだとはわかっているけど。
会話が平行線の一途なのでそれも仕方ないとは思うけど。
でももう少し相手の事も考えようよ、ねぇ？
そこで自己完結されたら、私はどうすればいいというのだろうか？
いや、放置しておけばいいんだろうけど。
でもそれじゃ、胸の中がスッキリしないのよ。
我ながら、難解な性格だとは思うけど仕方がない。

「この際夢でも何でもいいから、ちゃんと聞いていてよ」
「そんな、投げやりな」

先程までのやり取りは一体なんだったんだ？　と、思えるぐらい
少年は投げやりな言葉を吐いた。
しかも、本人認めるし。

「投げやりでも何でもいいよ。時間がないんだからさ」
「時間がない？　それってどういう・・・・・・」
「この押し問答も時間の無駄なんだけど。でも、まぁいいか。
時間が無いって言うのは、もうすぐ君が新しい命として生まれる
からだよ」
「新しい命？」
「そう。簡単に説明するけど、君は既に死んだんだ――ああ、とり
あえず聞いていてね。信じる信じないは別として。
ーで、死んだら何処の世界にでもある『輪廻転生』っていう、生
まれ変わる為の輪に入っていくんだけど・・・・・・。
残念ながら、君には適応されなかったんだ」

「適応されない？　どうして？」

別に少年の話を信用しているわけではないけど、疑問は少しでも減らしておくべきかな？　と質問した。
他にも気になる言葉はあったけど、その中でも一番気になるものを最初に質問した。
時間がないと言いながらも、少年はちゃんとその疑問に答えてくれるらしい。
それは少年の言葉に反論してないからなのだろうか？

「君の魂はここ――太陽系？　地球？　なんて言えばいいのか説明し辛いけど、とにかくこの世界のものじゃないんだ。
『輪廻転生』システムが適応されるのはあくまでも自世界のみ。他世界の魂は適応されず、ただ消滅していくしかない。
消滅した魂は、二度と復活する事はなく無に取り込まれる。――完全なる『死』を迎えるんだ」
「はぁ」

もう、どうつっこんだらいいのか分からない。
その所為か、相槌がなんとも情けない声音になってしまった。
とりあえず今はそんな事よりも、少年の言葉から気になる単語について考えてみる事にした。

――『輪廻転生』『他世界』

この二つの言葉は間違いなく、会話のキーになるのだろう。
『輪廻転生』って宗教的考えよね？
解釈は宗教によって違うとは思うけど。
それに『他世界』？　ファンタジー要素をプラスしたって事？
ファンタジーは嫌いじゃないけど、自分に直接関わらない範囲でっ

ていうのが言葉の前に付くのが絶対条件だ。
私にとって。

「納得してもらう必要は無いから。ただ知っておいてほしいだけ。
椎名結歌。君の魂は生まれ育った世界のものではなく、異世界――僕の世界の魂なんだ」
「・・・・・・。私と君の魂は同じ世界のモノだって言いたいの？」
「そうだよ。君と――君の魂と僕は同じ世界の人間だ。
そして君の魂が『死』に向かっていると教えてもらったから、僕が迎えに来たんだよ」
「教えてって、一体誰によ？」
「君の世界で言う所の『神』かな？　『魔王』でもいいけど」

いや、ちょっと待って。
『神』も『魔王』も存在してないし。
仮に存在していたとしても、『神』と『魔王』って役割別だよね？
相反する存在だよね？
それ以前に、そんな存在達に教えてもらったらしい少年の立場は一体何なんだ？
異世界の『神』だか『魔王』だかと連絡が取り合える存在って言うのは、普通に考えるとそれと同じ存在だよね。
だけど、目の前の少年からは神々しさも邪悪さも一切感じない。
ただ普通の少年にしては大人びている気がするというのと、造詣が整っていて作り物めいたものを感じる事ぐらいだ。
でもそれは生活環境やら、遺伝的なものが関係するから理由にはならない。
結局その事から導き出される答えは唯一つ。
――少年の話は申し訳ないけど、私には理解できない。という事だけ。
納得しなくてもいいって言われたけど、納得以前に理解が出来ない。

そんな私の混乱なんか気に留めることもなく、少年は淡々と話を続ける。

「そういった理由で、僕は君の魂を迎えに来たんだ。
だって、自分の世界の子が『死』を迎えるなんてあまりにも悲しいからね」

以前に似たような事でもあったのだろうか？
少年の退紅色の瞳が、悲しそうに揺れた。
だがそれは一瞬の事で、私が瞬きをした間に少年の瞳は元に戻っていた。

「ただ今回はかなりイレギュラーな事だから、大変申し訳ないんだけど君の『椎名結歌』としての記憶――自我は持ったまま僕の世界に生れ落ちる事となる」
「えっと、それってどういう・・・・・・？」

理解出来ないと思っても、悲しいかな。質問をする事は止められなかった。
やっぱり、疑問を感じると知らずと声に出てしまうものなのよ、うん。

「言葉通りの意味だよ。君は赤ん坊から僕の世界で人生をやり直すんだ。
ただ、世界のルールの乗っ取って『椎名結歌』という自我を持ったまま。
勿論、一回その世界で死ねば次に生まれる時は全てリセットされて人生をまっさらな状態からやり直せるから、その点は気にしなくても大丈夫だよ」

少年は何でもない事のように、軽く言う。
告げられた内容とはかけ離れている軽さだ。
それは、少年が当事者じゃないからなのだろうか。
それとも元々の性格なのだろうか。
とりあえず色々と突っ込みたいところはある。
それはもうごまんと。
例え理解できなくても、出来ればもう少し丁寧に噛み砕いて教えてもらいたいものだ。
そうすればほんの少し、極若干に理解できるかもしれないし。

「でも、それを他の人には言っては駄目だよ。
『自分は別の世界で生きていて、その時の自我を持っているんです』なんて言ったら、間違いなく変人、悪くすれば狂人扱いにもなりかねないからね」

まるで親切に諭すように言う少年。
少年の言う事は尤もだと思う。
私が人からそんな事を言われれば、間違いなく思うだろう。
でも、今はそんな事を言うよりももっと違う事を言うべきなのではないの？
思わず眉根が寄ってしまった。

「まぁ、慣れるまで時間はかかるかもしれないけど、頑張って」

少年がこれで話は終わりとでも言うように会話を締めくくった。
いやいやいや！！
私としては色々と言いたい事があるんですけどっ！？
そう思って言葉を紡ごうとした私の身体が突如、揺れた。
地面が揺れたわけでもないのに一体どうして？　と言葉を発するタイミングを逃して、それどころか自分の状態を目の当たりにして私

は完全に言葉を失った。

――浮いているんですがっ！？

しかもゆっくりと、少しずつ早く地面から遠のいて行ってるんですけど！？

なんでこんな事態にと、混乱に陥っている私を少年は別段驚いた様子もなく見ていた。

そんな少年の様子を視界の端に捉えた私は、これは少年がやっている事なんだと気付いた。

「ちょっと！！　降ろしてよ！！」

私が叫んでいる間も、身体は上へ上へと上がっていく。

まるで上昇気流に乗る飛行機のように。

残念ながらそのスピードは比べるまでもなく、違うものだったけど。

ぐんぐんと吸い込まれていくように上がって行く身体。

それに伴って光が強くなっていく、目が段々と開けられなくなりそうなほどに。

気が付くと少年の姿は豆粒ほど小さくなっていた。

もうこの距離ではお互いの声なんか聞こえやしないだろう。

くそっ！

なんていう夢なんだ！！

これは悪夢だ！　悪夢に分類するしかないっ！！

心の中で罵倒を吐いたのを最後に、結歌の意識は光に包まれて消えていった。

その様子を下から一切目を逸らす事無く見ていた少年は、彼女の姿が消えたのと同時に言った。

世界に宣言するかのように。

「ようこそ椎名結歌(しいなゆいか)、僕らの世界イリスティニアへ。
そして・・・・・おかえり。――」

少年の顔には、初めて笑顔が浮かんでいた。

◆1―4

強烈な光が視界を埋め尽くす。
あまりの強さに、目をぎゅっと固く瞑った。
その光が徐々に弱くなった頃、固く瞑っていた目をそろそろと開ける。
目に見えるものが自分の部屋であります様にと、ささやかに願いつつ。
そうして開けた先に見えたものは、私が想像していたものとは違った。
いや、ある意味同じだったのかもしれない。
そんな事を頭の隅で思いつつ、ただ素直に現実を受け止めた。
これが夢なんてオチは流石にもう、ないだろう。
何せさっきの立て続けにおきた、黒や白一色の空間よりも、こちらの方が遙かに現実味もそして生活感もあったのだから。

――目に入ったのは見知らぬ天井だった。

距離がかなりあるようなので、天井の模様は見えないが、白一色なのは間違いない。
染み一つ見えない、綺麗な白色の天井。
照明器具は見当たらないけど、壁面にでもついているのだろう。
デザイン重視だったらそういう事もあるだろうし。
照明はまったく見えないが、部屋には光が溢れていた。
その光は人工的なものではなく自然なもので、私の位置からは見えないが窓から射しこんでいるのだろう。
ただ、その光が朝なのか昼のかは全くわからない。
何せ視界には時間を表すものが、なかったから。
部屋の中に赤みが射していないので、夕方でないのは分かるけど。

そこまでの観察を終えると、今度は自分の状況が気になった。
どうやら私は、仰向けに寝かされているらしい。
今の状態ではこれ以上の情報は手に入らないと、周囲に視線を向けるために首を動かそうとするけど、思うように動かない。
固定されているわけではないとは思うけどと、念の為に両手と両足を動かしてみる。
とりあえず動く。
動くけど、思った以上には動かない。
拘束されている感じは受けないのに、あまり身体の自由はきかないようだ。
今度は一体どういう状況なのだろうと――混乱しているのか、それとも慣れてしまっただけなのか。思考に耽る事にした。
何せ身動きが取れない以上、天井をただ見るという事しか出来ない。
そうなると考える事ぐらいしかやる事はない。
そうしてただじっと天井を睨んで、答えの出ない――出るわけない。
考え事をしていた私の視界の隅に何かが動くのが見えた。
この状態になって初めての変化で、私はその動くモノに焦点を合わせるべく視線を動かす。
身体があまり動かないので、見える範囲には限りはあるのだけど。
その動くモノはどうやら人らしく、頭が何度か見えた。
ただ、顔も身体も見えないので性別も、年齢も――それこそ種族も。分からなかった。
間違いなく言えるのは見知った人物ではないという事だ。
何せ私の知り合いには髪の色が『白青』なんていう人物はいなかったから。
染めたんだろうか・・・・・？
だとしたら、なんて独創的な色を選んだのだろう。
私もたまに染めたりするけど仕事上そんなに派手な色を選ぶ事も出来ないから、無難にブラウンや明度を落とした赤が精々。
そんなどうでもいい事をつらつらと考えていた時、その髪の持ち主

がこちらにやってきた。
相手が近寄ってきてくれたおかげで、外見は分かった。
男の人で外人さん、らしい。
爽やかショートって感じの、若干襟足の長い髪とブラウンゴールドの瞳、肌の色は白。勿論健康的なという言葉がつくけど。
年齢は、うーん・・・・・・。
分かりづらいんだよね、外人さんって。
個人的見解としては二十代後半から三十代半ばという感じかな。
表情には笑顔――嬉しそうなと付け足しておく。があるので、私に対して悪意めいたものは感じられない。
相手を観察する前に、自分の身の安全を考えるべきだったなあ。なんて今更ながらに思った。
男の人は私の傍までやってくると、行き成り両脇の下に手を突っ込み、そして私を抱き上げたのだ。

「っ！！」

予想もしてなかった展開に、叫び声をあげる事なんか出来やしなかった。
なんでそんな軽々と持ち上がるの！？　とか、人も断りもなく抱き上げるなんて失礼でしょうっ！？　等の文句は思い浮かんだけど。
そのどれかの文句を私が言う前に、あろう事か男の人は嬉しそうに頬ずりまでしてきたのだ。
いや、ちょっと待ってよ、落ち着いてっ！！
見ず知らずの人にそんな事される覚えも謂れもありませんからっ！！
半ばパニックを起こしながら、それでも抵抗しようと手足を動かしても、全然相手には堪えた様子もなく。
それならばと声を上げれば、その声は残念ながら言葉になっていなかった。

「あー！！」

出てきたのは、聞こえたのは、迫力も何にもない一音、ただそれのみ。
勿論、自分の中ではちゃんと言葉にして喋っていた。
でも出てきたのは言葉なんてものではなかった。
その事実に、背中がヒヤリとする。
まさか、そんな。
私の内心の不安をよそに、男の人はますます笑顔を浮かべると何の前触れもなく『チュッ』と軽い音を立てて頬にキスを落とした。
――しかも何度も。
思わず身体が硬直する。
まさかそれ以上の行為はしてくれるなよ、なんて心の中で必死に思っていた。
その祈りが通じたのかはよく分からない。
男の人は満足したのか、キスを止めると首を横に回し誰かに向かって話しかけていた。
いや、話しかけていたと思う。
残念な事に私には、男の人がなんて話しているのか分からなかったから。
分かったのは、その言葉が日本語ではなかったという事ぐらい。

『アルテナ！　私を見て笑ったぞ！　この愛らしい笑顔はまるで女神のようじゃないか！　いや、私にとっては女神そのものだよ！』
『あらあら。シュトラスってば、まるで子供のようよ』

ふふふ。という女性の笑い声が頭上から聞こえてきた。
男の人と会話をしていたのはきっとこの女性なのだろう。
まっすぐサラサラなストレートのブロンドの髪に、優しい眼差しを浮かべたアジュールブルーの瞳。

歳は男の人と同じぐらいか、少し若いのかもしれない。
本当、外人さんの年齢は分かり辛い。
そんな事を思いながらも視界にはいる二人を見て、間違いなく一枚の絵になるなぁ、なんて事を暢気に考えてしまった。
何せ二人とも、顔の造詣が整っている――美人さん達だった。
美人さん達二人の顔には幸せいっぱいという笑みが浮かべられていた。
その幸せそうな表情を浮かべている二人の視線の先には、言うまでもなく私が居るわけで。
状況的に考えても、やっぱり間違いないのかもしれない。
本当は信じたくなかった。
でも、先程何気に動かした視界の端に捕らえた私の手。
あれは間違いなく・・・・・・。

――赤ちゃんの手だった。

あの少年との出来事は夢なんかじゃなくて・・・・・・。
告げられた内容は真実だったのだと。
現実を突きつけられて、ただ愕然とした。
今からでも喜んで夢オチを受け入れられるなんて心からの願いは、叶う事もなく。
絶望を感じている私の心とは裏腹に、私を抱いたまま二人は幸せそうに何時までも微笑んでいた。

――それが私が生まれ変わった世界で迎えた、最初の日だった。

◆2―1

トコトコと廊下を歩く。
実際はそんな音はしない。あくまでも気分だ。
ビロードの赤色絨毯は私の足音を消し去り、柔らかいながらも弾力のある毛は足の疲れを感じさせない。
とは言っても、限度というものはあるけど。
さすがに三歳児の足では、歩幅が小さい為距離という現実が重く圧し掛かってくる。

――三歳児。

そう、私はこの世界に生れ落ちてから三年の時を過ごした。
未だに夢オチを願っていたりするけど、それはきっとないと頭では理解している。
ただ、心だけが納得できないのだ。
だって、三歳の――いや、今はだけど。身体に二十三歳の心よ？
今まで色々な事は経験しているわけで。
子供の何も分かっていない心なら出来る事も、二十三歳の大人だった人間が羞恥を覚えないわけないでしょ？
一歳になるまでは寝るのが仕事みたいなものだったから意識はあまりなかったけど。
それでもやっぱり、母乳とかオムツの交換とかそういうものは羞恥を覚えるわけで。
出来たら永遠に記憶を抹消したいんだけど、そう都合よくはいかない。
まぁ、相手は完全に赤ちゃんと思っているわけだから耐えられる事なんだけど。
これで相手がこっちの精神年齢？　を知っていたら一体どんな羞恥

プレイなんだっ！？　と突っ込むんだけど。
その心配は皆無のようで、とりあえずホッとはした。
あの少年の言葉じゃないけど、小さい子供が『私二十三歳なんです』なんて言ったら間違いなく精神科行きだろうなと思う。
あんな幸せそうな――この世界に最初に見た美人さん達は今の私の両親らしい。人達を悲しい思いにはさせたくない。
だからこれは死ぬまで私一人の――少年は除くけど。秘密だと固く心に誓った。
そんな感じで三年間過ごしてきたんだけど。

はふー。と思わずため息を一つ吐く。

僅か三歳にしてこの疲れきっているため息は如何なものかと思うけど、仕方がない。
だって、色々と大変だったもの。
羞恥云々は別として。

――言葉が分からない。

この世界の言語って、どっちかっていうとフランス語とかそっち系統みたいなのよね。
いや、勿論同じじゃないと思うけど。
日本語に慣れ親しんでいる私としては――精神がというか、意識がだけど。あの流れるような言葉を言葉と認識するのにはかなりの努力と忍耐と時間が必要だった。
尚且つ、それも自分が話さなければいけないという二重苦。
きっと同じ年頃の子達と比べるとかなり遅かったに違いない。
発育不良なんて思われて、あの美人さん達を悲しませるわけにはいけないと一人使命感に燃えて、もう、本当に死に物狂いで覚えたものだ。

あんな必死さは前の人生でも――こんなふうに思うと、ちょっと悲しくなってしまうけど。なかった。
その甲斐あってか、ある程度の会話は出来るようになった。
さすがに聞いた事のない単語とかちょっと難しい言い回しには、未だに返答には困るけど。
そして私の話す言葉は、若干舌足らずだけど。
それでもあの美人さん達――両親は、責めるわけでもなく逆に必死で言葉を覚えようとしている私を『急がなくてもいいんだよ』と宥めてくれるのだ。
普通は『あそこの子はもうしゃべれるのにうちの子は・・・・・・』ってなるものだと思う。
言葉に出さなくても、全く気にしていない親はいないと思う。
でもあの二人からそんな気配を微塵も感じず、尚且つ『人それぞれなのだから、自分のペースでいいのよ』なんて優しい言葉までかけてくれる始末。
その事もあって、私はそれはもう必死に言葉を覚えたものだ。
おかげで、三歳並の言葉を操れるようにはなったと思う――多分。
何せ、この世界で自分と同じ年頃の子達と会ったことがないので比べようもない。
子供が家にやって来る事もなければ、私が外に出る事もなかった。
そんな事も相俟って、この世界の事とか自分の居る国の事とか、自分の生まれた家の事とか何にも知らないのだ。
分かってる、分かってるよ。
世間一般に考えて、三歳の子供にあれこれ教える事なんかまだ早いって事ぐらい。
でも肉体は三歳だけど、中身は二十三歳なんですよ！
のほほんと子供しているわけにもいかないんですよ！

――精神衛生上。

単なる私の我侭だとは分かっているけど、それでも日長ボーっと暮らしているわけにもいかない。
何時死ぬかも分からないのだ――前の私のように。
だから・・・・・・。
気が逸っているのは分かっている。
でも、知らない世界では、慣れない――馴染みない世界では、何かをしておかないと心を覆い尽くすような喪失感や寂寥感に飲み込まれてしまいそうになる。
その結果、気を紛らわすように死に物狂いで言葉を覚えようとして、知識を求める。
そんな私はきっと、世間一般の子供らしくないだろう。
客観的に見ても、十分変わっていると思う。自分ながらに。
その点に感してはあの人達には申し訳ないなぁとは思うけど。
それでも何かに意識を向けていないと、ふとした瞬間に訪れる寂寥感に心ごと囚われてしまって二度と戻って来れないような気がして。
だから私は遮二無二に知識を求める。
この世界に居てもいいと、自分が納得するまで。

辿り着く答えは、結局いつもここ。

思わず自嘲な笑いが浮かぶ。
居てもいいって、実際居るんだからそれって可笑しいよね。
言ってしまえば、私がただ二十三年生きていた私を――椎名結歌を捨てられないだけだ。
まさかこんな思いをするなんて考えてもみなかった。
こんな苦しい、やるせない思いをするぐらいなら、前世？　の記憶というか意識もまっさらにしてくれたらいいのに。
世界のルールかなんだかしらないけど、正直迷惑の一言しかない。
ここにあの少年が居たら、絶対文句を言ってやったのに。
そうして退紅色を纏った少年を思い浮かべた。

意外にもあの時の事は忘れず綺麗に記憶に残っていた。
転生の際の記憶とでも言っておこうか？
鮮烈な赤の色ではなかったけど、それでも少年に似合っていた退紅色はもしかしたら痛烈に脳裏にいや、記憶に刻まれたのかもしれない。
だから、忘れなかった――それだけの事だったかもしれない。
結局どういった理由であれ、私があの記憶を忘れていないのは紛れもない事実なのだ。
しかし、あの少年が何者か分からず仕舞いだったなぁ・・・・・・。
また会える、なんて事はさすがにないよね？
会ったところで、別に用事はないし。
仮に会ったとしたって文句を言うぐらいしかないんだけど。
その文句も、少年にとっては理不尽なものでしかないでしょうしね。

そんな事を考えながら歩いていた私の目の前には、大きな重厚なドアが一つ。
ただ単に三歳の私にしては、と付け加えるべきか。
いや、重厚は歳には関係ないけど。
私は「よしっ！」と気合を入れると、ドアノブへとジャンプした。
だって私はこの先の部屋に用事があったから。
残念な事に三歳児の身長では、ドアノブに手が届かないのだ。
だから、ジャンプをしてドアノブを掴む必要がある。
でも、それからがまた大変。
掴んで下に押し下げたと同時に、体重を使ってドアへと体当たりしなければいけないのだ。
そこまでしないとこのドアは開かない。
見た目通りに重いんだよね、このドア。
引き戸だったらまだ楽なのに――多分。
そうしてジャンプをする事数回。
はぁはぁと、息切れがしだしたので少し休憩をとる事にした。

さすがに子供の体力じゃ厳しいものはあるかと、些かの行儀悪さに目を瞑りつつそのまま床に座り込む。
あー。もう少し身長欲しいなぁ・・・・・・。
年を重ねれば伸びるんだろうけど。
あと、力も欲しい。
なんか体力つくことでもやろうかなぁ。
でも、成長途中で無理しちゃ逆に成長を損なう事もあるし・・・・・・。
うう～っと一人唸っていると、頭上に影が射したのが分かった。
どうしたんだろうと見上げると、先程までピタリと閉じられていたドアが開いている。
そしてそのドア奥、部屋の中に居た人物。
その人物がドアを開けたのだろう。

「やっぱり来たんだね、フィアナ」

やや困ったように、それでも優しい眼差しで私を見下ろしたその人物に、私は悪戯が見付かった子供のように罰が悪い思いを抱きながらも、出来うる限りのありったけの笑顔を浮かべた。

◆2―2

「にいさまっ！」

部屋のドアを開けて立っていた人物は今の私のお兄さん――フェルハントお兄さん。
そして先程彼が言った『フィアナ』というのは、今の私の名前だったりする。
未だに慣れないけれど、それでも一年前に比べればマシにはなった方だ。
明らかに『椎名結歌』として生きてきた年月の方が長いので、自分の名前だと認識するのに今はどうしても一呼吸かかってしまう。
慣れるまではきっとこんな状態のままだと思うけど、こればっかりは仕方ない。

目の前の私の兄――フェルハントは父親と同じ金茶色の瞳に白青色の髪。母親譲りのまるで絹糸のような滑らかさをもったサラ艶ストレートの髪。
光に当たれば天使の輪が見事に出来たりする。
スッとした滑らかな稜線を描いている鼻梁に切れ長の二重。
睫毛は髪と同じ白青色で彩られ、長くそれでもしっかりとカールされている。
美人さんな両親の顔の造詣をバランスよく受け継いだようで、これまた可愛いより断然カッコいい美少年。
切れ長の瞳が冷たい印象を与えそうだけど、常に柔和な笑みを浮かべているからか、その眼差しは柔らかい。
私の前の世界でなら間違いなく、モデルもしくは俳優にでもすぐスカウトされているだろうと思う。
声も彼の人となりを表してるかのように柔らかく心地いい声音。

例えて言うなら、春の陽だまりのような。そんなほんわりと感じさせる柔らかさだ。
ただ、彼はまだ六歳――私より三つ年上になる――声変わりを迎えると変わってしまうと思うと、些か残念な気持ちになってしまう。

「僕の小さなお姫様。何時までもそんな所に座り込んでないで」

その言葉と同時に「はい」と私の目の前差し出された手。
彼の瞳には愛しむ色が宿っている。
何時まで経っても立ち上がろうとしない私の事を、どうやら疲れた為と思ったからだろう。
当たり前のように手を差し伸べてくる。
こんなところがまた凄い。
優しいんだ、このお兄さんは。
さりげない気遣いが既に身についている――まだ六歳だというのに。
しかもちょっとした動作でも気品があるというか優雅というか、とにかく洗練されている。
勿論身内贔屓なんかじゃなくて。
一応過去の自分の周囲の人達を思い浮かべた結果――比べる事が既に間違いかもしれないけど――導き出した答えだ。
まぁ、環境というのもあるとは思うけどね。
未だ座り込んだまま、彼の手を取るでもなく見上げていた私を――ただ、思考の海に沈んでいただけなんだけど――フェルハントは行き成り抱き上げた。

「えっ！？」

行き成りの浮遊感に、思わずフェルハントにしがみつく。
そして、驚きの表情でフェルハントの顔を見上げた。
横抱き――世間一般でいう『お姫様だっこ』をされた私。

その結果、思いのほか至近距離にある顔はやはり美少年で思わず見惚れそうに・・・・・・。
って、違うでしょ！　私っ！
自分に叱咤して、激しく鼓動を打つ心臓をなんとか落ち着かせると言葉を紡いだ。
なるべく動揺を悟られないように、声音を抑えて。

「にいさま。わたし、じぶんであるけるよ？」
「気にしなくていいんだよ。僕がフィアナを連れて行きたかったんだから」

そうして殊更優しい笑みを浮かべて見つめてくるフェルハントを、どうして邪険に出来ようか。
如何に今の自分よりは年上だとしても、中身ではこちらの方が遙かに年上なのだ。
そんな小さな少年の優しさは『いい子』だと褒めるべきで、無碍に断るものではない。
思わず頭を撫でたくなる衝動をぐっと堪え、替わりに私は感謝の意を告げた。

「ありがとうにいさま。にいさまはすてきでやさしくて、まるでおうじさまみたい」

ついでに日頃思っている事もこっそりと伝えた。
なのでちょっと照れ笑いを浮かべてしまう。
若干顔が熱いと感じてるのは、恥ずかしさもあるからだろう。
こういう告白ってほんの少しの勇気というか、恥ずかしいというかそんな気持ちがどうしてもあるから。
もともと、ストレートな感情表現が苦手というのもあるかもしれないけど。――勿論、怒っている時なんかは別として。

でもこの世界は感情をストレートに表現するのが普通のようなので、両親やこのお兄さんはこちらが恥ずかしいと感じる言葉を一つの躊躇もなく言ってくる。
だから慣れないといけないし、こちらも返してあげないと駄目だと思う。
そう思うから時折、意を決して告げるのだ。
それには羞恥が付随してくるが、この際無視。
案の定、フェルハントは嬉しそうに目を細め尚且つ、感情の高ぶりを表すようにギュッと私を抱く力を強めた。
多分滅多にそういう事を言わない私が言った事が、きっと嬉しかったんだと思う。
こういう何気ない時に私って、いや『フィアナ』って愛されてるんだなぁって感じる。
そしてそう感じる時、私は『椎名結歌』として『フィアナ』を観察している事に気付く。
――『フィアナ』は私だけど私じゃない。
そんななんとも言えない感覚。
これも自分の気持ち次第だとは分かっているけど、それがなかなか上手く出来ない。

「何時まで僕はフィアナの王子様でいられるのかな？
例え将来王子様の役を降ろされたとしても、騎士の役だけは絶対降りないからね？」

チュッと親愛のキスを私の額に落としながら言うフェルハント。
そんな彼の行動に、出口のない迷路に彷徨い出ようとしていた私の思考は目の前のフェルハントの事へと切り替わる。
フェルハントはじっと私を見ていた。
その瞳には変わらず慈愛の色が宿っているのが分かる。
そしてその中に心配な色が混じっているのも・・・・・。

その事に気付いた私は、自分自身に喝を入れた。
自分の事にばかり気にして、周囲の事に気が付かないなんて。
しかも、こんな小さな子に心配させるなんて・・・・・・。
だから私はニッコリと笑顔を浮かべる。
彼の心配を払拭するように。

「にいさまにはいつまでも、ふぃあなのおうじさまでいてほしいです」

ほんの少しの本心を混ぜて。
そう言えばフェルハントが間違いなく喜んでくれると知っているから。

「ああ。僕はフィアナが僕を要らないと言うまで、フィアナだけの王子様でありつづけるよ」

輝かんばかりの笑顔で告げたフェルハントに、またしても私は見惚れそうになった。
しかも紡がれた言葉は甘い。
ついでに声音にも甘さが含まれていたと感じたのは、見惚れた所為なのだろうか？
まぁいいかと私はそれを気のせいだと無視し、替わりにギュッとフェルハントの首に腕を回した。
これ以上、彼に心配をかけないようにと・・・・・・。

◆2―2（後書き）

お兄さんの登場に思いのほか梃子摺ってしまいました・・・。

◆2―3

フェルハントはふらつく事もなく、しゃんとした足取りで部屋の真ん中を横切った。
私を抱え直す事もなく、安定した一定のリズムで歩いている。
僅か六歳とは思えないぐらいしっかりしていた。
こんな細い腕のどこにそんな筋力があるのだろうかと、首を傾げたいぐらいだ。
目指しているのはこの部屋に鎮座している、入った時にあったドアと同じぐらい重厚な、それでいて繊細さを感じさせる机のある場所。
そして同じような意趣を凝らした一脚へと、そっと、まるで壊れ物を扱うかのごとく私を降ろした。
そこまで気を遣わなくても怪我なんかしないのにと心の中で苦笑をしつつ、でもこれが彼の性格だから仕方ないんだよねと思った。
本当に私には過ぎる兄だと思う。

「ありがとう、にいさま」
「どういたしまして、僕のお姫様。僕が戻ってくるまでここで大人しく待っているんだよ」

チュッと私の頬にキスを一つして、フェルハントは部屋の奥へと歩いて行った。
私はその姿が見えなくなるまで笑顔を浮かべて見送る。
だって途中で何回かフェルハントが心配そうに振り返って、私の様子を見ていたから。
ここで不安げな顔でも浮かべようものなら、彼は間違いなく走って戻ってきただろう。
――フェルハントはそういう人物なのだ。
だから私は彼の姿が見えなくなるまで笑顔を浮かべている必要があ

った。
そして彼の姿が見えなくなったのを確認すると、ふうと小さくため息を一つ吐いて椅子へと凭れ掛かる。
三歳児を演じるというのは少なからず疲れるのだ。
だって、素の自分じゃないんだから仕方ない。
とりあえず歳相応らしくを心がけてはいるんだけど・・・・・・。
何せ近くに見本になるような子供もいないし、過去の自分の三歳児の記憶なんてものも残っていない。
だからたまに『失敗したかも』と思う時はある。
そういう時は、何もなかったように知らないふりで押し通したりしてるけど。
だから、ちゃんと演じられているのかは分からない。
でも見た目は明らかに子供だから、誤魔化されるかな？　という思いはある。
今のところ誰にも指摘されていないからきっと、大丈夫――だと思う――そう信じたい。
悩んだって状況が変わるわけでもないし。
ここ前向きに生きていくしかないのだ。うん。
手持ちぶたさだったり、何もする事がないと気付けばそんな事ばかり考えてしまう。

――永遠に答えが出ない事ばかりを。

やる事があればそちらに意識が集中するから、考えなくてもいいんだけどね。
でも今はフェルハントが戻ってくるまで何もする事はないし。
部屋の観察って言っても、此処には何回か来た事があるしなぁ・・・・・・。
もう少し勉強が出来るようになれば、この部屋を十分活用する事が出来るのに。

そう思いながらちょっぴり恨めしげに、部屋を見渡した。
今私が居る部屋は、沢山の本が置いてある。――所謂書斎だ。
それも、個人の書斎なんていう規模ではない。
――この世界での個人の書斎の規模は分からないけど、少なくとも今までの感覚で判断するなら個人レベルではない。
前の世界の基準で言うと、ちょっとした学校の図書館というぐらいの広だったりする。
学校といっても規模によっては違うから、部屋の広さだけを表すとしたら二十五メートルプールぐらいというのが妥当かもしれない。
何せ三歳児の身体だから、全てが大きく見えてしまうので正確なところは分からないのよね。
そんな部屋に、天井近くまである高さの本棚が等間隔に並べられていて、整然としかもギッシリと本が入ってある。
定期的に整頓されているのか、それとも借りる人が定位置管理出来ているのかは分からないけど。
でも部屋が埃っぽくないし棚にも埃は見えなさそうだから、定期的に整理している人がいるんだろう。
そういう人がいても全然不思議ではない。
だってこの世界で私が生まれた家は裕福のようだから。
この広い書斎もそうだけど、他にも沢山――少なくとも三十ぐらい――部屋があった。私が歩き廻って調べた限りでは。
使用人という人達もいる――ちなみに私にも一人そういう人が付いていたりする。
家――屋敷と言った方がいいかもしれない――に置いてある家具や調度品も凝った物があるし。
今私が座っている椅子も、見事な華の彫り物がされていて木の温かみを損なわない意趣が施されている。
目の前の机なんか、真ん中をくりぬいて生花か造花か分からないけど花が数種類、お互いを引き立たせるような配置をしてその上からガラスが嵌め込まれている。

目の疲れに配慮してだろうか、上から見た時に和むような優しい色合いの花が置かれている。
しかもこれ、見る度にいつも違う花だからこれまた凄い。
一体どれだけの手間をかけているんだろうか。
そしてガラスの端には、椅子と同じように華の彫り物がされていた。
服一つをとっても、私が今着ている可愛らしい柔らか素材のワンピース――というよりドレスかもしれない――のような服も既製品なんかじゃないだろう。
サイズがピッタリなのだ。
窮屈さもゆるさも感じず、まさしく誂えましたとしか言いようがない。
一体何時採寸をとられたのか記憶に全くない辺り、このピッタリ寸法はどうやってと不思議には思う。
何気に縫い目なんかを見ると手縫いだったりするので、ミシンはこの世界にはないんだなぁなんて事を現実逃避とばかりに考えてしまったけど。
生地の肌触りも良いし――勿論化学繊維なん存在していないだろう――一体幾らかかっているのか気になるけど、正直聞きたくない。
聞いてしまうと、きっと着れない。
着たとしても気になって、あんまり動く事はしなくなるだろう。
だから私の精神の安定の為に、ここは気付かないふりをするのだ。
こういうちょっとした事だけでも、裕福な家だという事が窺い知れる。
でも実際この家がどれほど裕福で、どういった家なのか全く知らなかったりする。
裕福だと思うのはあくまで私の感覚で、もしかしたらこの世界では一般水準レベルなのかもしれない。
何せ誰も私に教えてくれないのだ。そういった事は。
だからこの家がどういった家で、親がどういう仕事をしているのか全く分からないのだ。

それ以前に私はこの家から出た事もない。
勿論、この家にある庭には何回か出た事があるので正確にはこの家の敷地内からとなる。
そう、こういった経緯から私はこの書斎にいるのだ。
――誰も教えてくれないなら、自分で調べるしかない！！　そう思って。
だってこの世界の事すらも何も知らないし。
いやまあ、普通は三歳児にそんな事を教えてくれるなんて思わないから、知らないのは当たり前なんだろうけど。
だから自分で調べようと書斎にやってきたのだ。
数回、此処に一人でやってきた事はある。
お屋敷探検ー！　と一人でちょこちょこと家の中を歩き廻っていた時に偶然この部屋を見つけたのだ。
たまたまドアが開いていたので、さっきのような苦労もせず入る事ができたんだけど――思うに、その時誰かが掃除をしていたからなんだろう。
思わぬ出会いにちょっと感動しながら、いそいそと本を手に取って開いてみた。
どんな事が書いてあるんだろうと、ドキドキしながら。
案の定――読めなかった。
言葉もすぐ分からなかったから読めないだろうなとは思ったけど、もしかしてとほんのちょっと期待をしていんだけど。
ミミズがのたくったような文字。
英語の筆記体とはまた違う。なんだろうこれ？　そう思うぐらい今まで出会った事がない文字だった。
異世界だし、それも当たり前なんだろうけど。
だからといってここで諦める訳にはいかない。
分からなければ、覚えればいいだけの話だ。
誰かに教えてもらうしか方法がないのだけど、一体誰に教えてもらえばいいんだろう。

むむむと考え込んだところで思い浮かぶはずもなく。
私は食事の席の時に、思い切って両親に言った。
――文字の勉強をしたいと。
両親はまだ早いんじゃないかと言っていたが私が頑として譲らなかった為、そこまでしたいのなら仕方ないと苦笑と共に承諾してくれた。
そんな両親の様子に申し訳ないなと思わない事もなかったけど、それでも文字の勉強を諦める事は出来ないので心の中で謝った。
そうして両親が誰にお願いしようかと相談しあっていた時に、それまで黙ってやり取りを見ていたフェルハントが言ったのだ。
『だったら僕が教えるよ』と。
その言葉に私は慌てた。
何せ彼はこの歳にして、既に幾人かの家庭教師が付いていたからだ。
唯でさえ勉強で遊ぶ時間が削られているのに、自分の我侭の所為で彼の大事な時間を削る事は出来ない。
本来なら遊びたい盛りのはずだからだ。
だから私はなるべく彼を傷つけないように断るつもりだった。
『にいさまはおいそがしいのに、ふぃあなのせいでそのたいせつなじかんをつかってしまってはだめです』
本当に本当に、心を篭めて言ったのだ。
だがその言葉を聞いたフェルハントは瞳を悲しそうに伏せた。
そして意気消沈とした声音で『フィアナは僕の事が嫌いなの？』なんて言う始末。
まさかそんな言葉が返ってくるとは思わなかった私は、焦りながらもなんとか誤解を解いて元気を出してもらおうと、何度も何度も声を大にして言った。
『ふぃあなはにいさまがだいすきです！』『だいすきなにいさまをきらうことなんてぜったいありえません！』と。
今から考えるとどんな告白なんだと穴があったら入りたいと思うけど、その時は目の前の少年の沈んだ様子があまりにも居たたまれず

必死だったのだ。
そんなやり取りをしていた私達を見た両親は『この件は少し保留にしましょう』と、私達の頭を落ち着かせるようにそれぞれ撫でながら言ったのだった。

――その出来事が昨日の事。

幾ら両親に保留にしようと言われても、文字を勉強する事を諦める事は出来ない。
だから私は今日も、文字を読めもしないのに書斎へとやって来たのだ。
まさかそこにフェルハントが居るとは夢にも思わず。
彼はきっと私が書斎にやってくると予想していたに違いない。
だから自分の自由に出来る時間に書斎で待っていたのだろう。
自分の行動が読まれていた事に恥ずかしい気持ちと、彼の自由な時間を無駄遣いさせた事に申し訳ない気持ちが沸き起こった。
それでも、そんな事を言動どころか表情に出してしまえば、間違いなくフェルハントが気にすると分かっていたので私は何も気付かないふりをしたのだ。
そうしてありったけの笑顔を浮かべた。

――ただ、思わぬところで大好きな兄に会った妹と思えるように。

◆2―4

数分後、一冊の本を携えて戻ってきたフェルハントは私の横の椅子に座ると、微笑を浮かべつつ少しばかりの悪戯の光を宿した瞳を寄越した。

「遅くなってごめんね。お姫様はちゃんとお利口さんに待ってたかな？」

そこにからかいの色がないのは言うまでもなく分かっている。少しばかり寂しい思いをした妹を、元気付けようとした為の言葉なのだ。

その証拠に、纏っている雰囲気は相変わらずフィアナ――私に対しての溢れんばかりの慈愛を感じる。

だから私は子供らしく両頬を栗鼠の如く膨らまし、フェルハントに対する抗議の言葉を発する事にした。

「ふぃあなはちゃんと、にいさまのいいつけをまもってました」

「うん、ごめんね。フィアナは優しくていい子だって僕はちゃんと知ってるよ」

そうしてあやす様に優しく私の頭を撫でる。

私は予想通りの展開となって、内心で胸を撫で下ろした。

これで変に違うリアクションをとられたら、その後の行動に困ってしまうところだったから。

でもそうはならないと、少なからずの自信はあったけど。

だってフェルハントの性格から考えると、宥めるかあやすかのどちらかしかないと思っていたから。

そんな事を考えながら、抵抗する事無く大人しく撫でられ続けた。

実は、この頭を撫でるという行為が思いのほか好きだったりする。
優しく一定のリズムで撫でられるのが、存外気持ちいいからだ。
きっとフェルハントの愛情が込められているからなのだろう。
それに、撫でたり摩ったりはヒーリング効果があるとも言うし。
おかげでプウッと膨らましたままの頬も、段々としぼんでくる。
その行為の前では長続きしないのだ。
そして笑顔が自然と浮かんでくる。
フェルハントはその事を分かっているからこそ、撫でる手を止める事はなくそれどころか目を細め、幸せそうに笑んでいた。
始めは気持ちよくてうっとりとしていたけど、それが数分も続くと流石に気になってくる。
本来の目的はこういう事ではなかったはずだ。
チラリと視線をフェルハントに向けても、「ん？」と幸せそうな笑みで見つめ返してくるだけ。
間違いなく、フェルハントからはこれ以上の行動を起こす事はないと分かった。
仕方ないかと、私はこっそりため息を吐く。
勿論フェルハントには、気付かれない様に細心の注意を払ってだ。
そうじゃないと、彼は間違いなく心配するから。
そして少しの不安も見逃さないとでも言うように、私の頬を両手で優しく包み込んでじっと見つめてくるのだ――真剣な表情で。
これは想像とかではなく、実体験に基づいた事。
もう溢れすぎる愛情でお腹一杯です。降参です、白旗揚げます。そう何度言葉に出そうとして引っ込めたか。
でもそれは言葉に、音となって外界に放たれる事は一度もなかった。
だって掛け値なしの愛情だもの。
打算も悪意も、一欠けらいや一ミクロンも込められてないもの。
だから私はなるべく彼に心配をかけるような事はしたくないと思ってる。
自分が譲れない事は別として。

だってさすがに自分を曲げ続けて生きていくのは、しんどいから。
何せ既に今の状況が結構しんどい事になってるし。
ふぅと自然にため息が出そうになって、寸前でなんとかそれを止めた。
此処で溜息をなんか吐いたら、意味がない。それこそ終わりだ。
頑張れ私！　と、自分自身に無駄にエールを送ると気合を入れた。
とりあえず現状打破からはじめよう、うん。

「にいさま。いったいなんのごほんをもってきたのですか？」

気になって気になって仕方ないんです、とそわそわした動きをする。
そして視線をチラチラと何度も本へと向けた。
そうなると答えないわけにはいかないだろう。――フェルハントの性格上。

「フィアナに読んであげようと思って、一冊選んできたんだよ」

手を止める事無く、フェルハントは答えた。
読む？　私に？
此処には文字を覚えに来たはずなのに・・・・・・。
困惑気味にフェルハントと本を見る。
その視線を受け止めてか、フェルハントは撫でていた手を止めると苦笑を浮かべつつその本を私の目の前へと置いた。

「本当はフィアナに文字を教えたかったけど、それはフィアナが嫌だと言ったからね」
「いやだなんてふぃあなは、ひとこともいっておりません！」

どうしてそんな解釈をされたんだと、思わず語気を荒げてしまっ

た。
そんな私に「ごめん、ごめん」とまた頭を撫でてきた。
「うん、わかってるよ。フィアナは優しいから僕を思っての事なんだと。
でもね。僕はフィアナには遠慮してほしくなかったよ。
たった二人の兄妹なんだよ？　フィアナが甘えてくれた方が僕としては嬉しいんだ。
だって、僕はフィアナの王子様だからね」

そうして輝かんばかりの笑顔を浮かべるフェルハントを、私は直視する事が出来なかった。
ま、眩し過ぎるっ！！　この笑顔っ！！
漫画なら間違いなく『キラッキラッ』――ついでにバラも背景にありそう――という擬音がついている事だろう。
この素敵スマイルは、妹の私なんかじゃなく他のお嬢さんに見せてあげた方がいいのではと本気で思う。
それほどに心臓を鷲づかみされる、最強の笑顔だった。
ああ、きっとフェルハントはこの笑顔だけで世のお嬢さんを悩殺いや、瞬殺出来るだろう。――間違いなく。
我が兄ながらに恐ろしいっ！！
そしてそのまま何処かへと旅立とうとしていた思考を、私は強引に目の前のフェルハントへと向けた。
流石に返事をしないとまずいからだ。
別にフェルハントが拗ねるとかいった事ではない。
理由は簡単。
そうしないと何時までもこの『キラッキラッ』が消えないからだ。
それでは困るのだ。
だって、誰かが探しに来ない限りこの体勢のまま動かない。いや――動けないからだ。それも『永遠に』と付けても問題ないぐらいに。

強烈過ぎる笑顔は、ある意味メドゥーサの瞳に匹敵するのではないだろうかと――勿論、見た事はないけど――今初めて気付きました。自分がその立場にならないと分からない事って、世の中には本当にあるよね、なんて悟りを開いている場合ではなかった。

「ふぃあなはにいさまがだいじだから、だからにいさまのじゃまをしたくないのです。
こんなふぃあなはきらい、ですか？」

じんわりと瞳を潤ませて、フェルハントを見上げた。
悲しい顔とは裏腹に、脳は忙しなく動いていた。
もう、これでもか！！　と言うほど頭の中では人生の悲しい出来事を思い出している。
だってそうでもしないと涙なんて浮かんでこないもの。
嘘泣きなんて本当ごめんって思うけど、それ以外この状況を打破する事は残念ながら私には出来ない。
間違いなくフェルハントを困らせるとは思うけど、何時までもメドゥーサ、もとい素敵スマイルに拘束されるわけにはいかないから。
だから些か強引な、そして絶対失敗しない方法をとらせてもらった。
案の定、フェルハントの笑顔は見る影も無く消え失せた。

「そ、そんな！　僕がフィアナを嫌うだなんて！　そんな事、例え世界が崩壊しようともありえないよ！
僕はフィアナを愛する為に存在しているんだから。だから、ね？
泣かないで。
僕の愛しい愛しいお姫様」

フェルハントはまるで壊れ物に触れるかの如く、私の眦にそっと優しく唇を落とした。
そして滲み出ていた涙を拭い取る。

まさかそんな行動に出られるとは思わなかった私は「ひゃっ！」なんて間抜けな叫び声を上げてしまった。
驚きと共に、涙も完全に引っ込む。
いや、えっとあの、その・・・・・・。
あまりの事に頭も真っ白になり、段々と顔が熱くなってくる――きっと今の私の顔は真っ赤だろう。
そんな私の様子に、フェルハントは満足したのだろうか。
クスリと、笑った。

「やっぱり、フィアナは可愛いね」

耳朶へと触れそうな距離で、甘さを十二分に含んだ声音で告げられました。
思わず身体がブルリと震える。
あの、僅か六歳にしてこの行動なんですか？
色々と問題があるような気がするんですけど？
一体どこから突っ込めばいいのか、いやそれ以前に三歳児の私が突っ込んでいいのか。
そしてこの場合、私はどういった行動をとればいいのか。
ぐるぐるとただ廻るだけの思考に、私は答えを見出せないでいた。
このまま気を失うのが一番幸せだろうなんて考えた私は、決して間違いではないと思う。
ただ残念な事に、そんな器用な真似は私には出来なかったのだけど。

◆2―5

私は心底困ったという表情で、微動だにせずじっとフェルハントを見つめた。
そんな私の様子にフェルハントは眉尻を下げる。

「ごめんね。フィアナを困らせたかったわけじゃないんだ。
でも、フィアナが僕の気持ちに気付いてくれていないようだったから、やっぱり困らせたかったのかな？
うーん・・・・・。ちょっと言い表すのは難しいかな。どちらにせよ、僕が悪いから謝るよ。ごめんね。
こんな僕の事、フィアナは嫌いになっちゃったかな？」

声音の最後辺りが消え入りそうな弱弱しいものへとなっている。
あまりにも悲愴感漂うフェルハントの様子に、私は音が聞こえそうなほどぶんぶんと首を大きく横に振った。
そこまでしないと伝わらないんじゃないだろうかと、本気で思ったから。
それに、別に彼を苛めたいわけではない。
勿論、あんな表情をさせたかったわけでもない。
いやまさか、私のほんのちょっと困ったと思った視線であそこまでダメージを受けるなんて全く予想もつかなかったけど。
でもよくよく考えれば、フェルハントはまだ六歳なわけで。
六歳といえばまだまだ子供なんだよね。
ごめんね、全然気付かなくって。
見た目年齢三歳でも、精神年齢二十三歳の私が気付かなくってどうするよ！！
もう、本当にごめんなさいっ！！
実際謝るわけにはいかないから――だって理由なんか告げられない

もの――心の中で土下座させていただきました。
私の必死さが伝わったのか、フェルハントの気持ちが少しは浮上したようだ。
僅かに笑顔が――というか、苦笑？

「こんな僕でも、フィアナは好きだと思ってくれるの？」

浮上したと思ったけど、それはどうやら気のせいだったらしい。
そんなにさっきの私の表情とか、態度って酷いものだったの？
誰かに聞いて確かめたいと思っても、此処には私とフェルハントの二人だけだし。
フェルハントにそんな事でも訊ねようものなら一体どうなるか・・・・・・。
間違いなく今より酷い事になる。

「ふぃあなは、にいさまのことがだいすきです。
きらいになることなんてありません。それともにいさまは、ふぃあなのことがしんじられませんか？」

こんな言い方は卑怯だと分かってる。それでも言わなければきっと、堂々巡りな会話になるのは間違いない。
まさかそんな言葉が返ってくるとは思わなかったのだろう。
フェルハントは数回、驚いたように瞬きを繰り返すとふんわりと笑顔を浮かべた。
その笑顔を見て、漸く私はホッとした。

「参ったなぁ・・・・・・。フィアナには本当、勝てないよ」

そうでしょうとも、なんて同意は出来るはずもなく。
でも、この穏やかな雰囲気をもう少し味わっていたかった。だから

――。

「ふぃあなはいつでも、にいさまにまけっぱなしですよ？」

なんて言って可愛らしく小首を傾げてみた。

ついでにきょとんとした表情を作って。

いやー、我ながらにこの歳で作為めいた演技もどうかと思うんだけど、この際仕方ないよね？

なんか、小悪魔――出来れば『悪女』にはなりたくないので――への道をこのまま突っ走りそうな気がしないまでもないけど。

「じゃあ、そういう事にしておこうかな？」

そうして優しく、私の頬にキスを一つ落とした。

本当、スキンシップ多いよなぁ。

そんな事を考えながら、何とはなしに離れていくフェルハントの顔を見ていた。

私の視線に気付いているはずなのに、フェルハントは何も言わず目の前に置かれたまま放置されていた本をそっと開いた。

「話は戻るけど、僕はフィアナに文字を教える事を今回は諦めたんだ。

だって父上や母上が、フィアナに適任の先生を探してくるだろうと分かっているし。

僕の我侭で、これから開花していくフィアナの能力を妨げる事は絶対嫌だったから。

だからね、文字を教えるのは諦めたんだ」

「にいさま・・・・・・」

本へと視線を向けたまま、まるで懺悔の様に静かに話すフェルハ

ントに、本気で二度目の土下座をしたくなった。
私があの時申し出を拒否しなければ、彼は何も思い悩む事はなかったんじゃないだろうか。
それどころか『文字を教える』という主張が、我侭だなんて思う事すらなかったんじゃないだろうか。
実際それは我侭なんかじゃなく親切心だと私は思ってるけど、フェルハントはまるで戒めのように我侭だと信じている。
どうしてそこまで・・・・・と、思う。
我侭言ったっていいじゃないか。
まだ六歳だよ、子供だよ？　癇癪起こして親を困らせながらも、自分の我を通してもいいじゃないか。
子供にはその権利が十分あるはずだ。
そうして人は大人に成っていくんだと、私は思ってるから。
私だって別にフェルハントに教わりたくないわけじゃない、ただ邪魔をしたくなかっただけ。
フェルハントもそれを分かっているはずなのに、どうして・・・・・。
過去に戻れるなら、私は間違いなくあの時の自分を叱っただろう。
でも、そんな事出来ないと分かっている。
なら、今の私が出来る事をするだけだ。
私は決意をもって、フェルハントに話しかけようとした。
だが――。

「フィアナは何も気に病む必要はないよ？
　僕はフィアナに文字を教えるのを諦める代わりに、本を読んであげようと思ったんだから」

　そうしてまっすぐ、一点の曇りもない瞳で私を見た。
フェルハントの表情や瞳からは不満も嘘も感じられず、掛け値なしの本心だと感じられた。

だとしたら、私が言う言葉は決まっている。

「ありがとうございます、にいさま。
ふぃあなも、にいさまにごほんをよんでいただきたいです」

フェルハントを安心させるように、ふんわりと微笑んだ。
それで漸く、本当に安心したのだろう。珍しく見るからに安心しましたという表情のフェルハントを見たのだ。
それも、子供らしい表情の。
いつもフィアナ――私の前では『お兄さん』であろうという気持ちが強いのか、子供らしさが言動や行動、そして表情にも見受けられなかった。
その事がいつも気になっていた。
だからたまに態と、一緒に子供っぽい遊びもしたけど、それも何時も失敗していた。
もしかしたら私の所為で、子供らしい甘えや行動が出来なくなってしまったのではないだろうかとも思った。
そうして私が思い悩む度にフェルハントが優しく『どうしたの？』と聞いてくるものだから、慌てて何度も『なんでもない』と誤魔化した。
だって、そんな事教えるわけにはいかなかったもの。
あくまで私の心の平穏だけの為に、考えているような事だったから。
純粋にフェルハントを心配しるだけじゃなく、そこには打算も含まれていて。
ああ、なんだか汚らしい大人な自分がフェルハントの純粋な愛情を受けても良いんだろうかなんて事を思いもしたけど。
でも今、子供らしい表情を見る事が出来てホッとしている自分が間違いなく居て。
ああ駄目だ。なんだかぐるぐる。
感情が上手く抑制できないや。

でもこれだけはどうしても言いたい。
「にいさまは、すこしくらいわがままをいってもだいじょうぶだとおもいます。
おさえることなんて、しないで。ふぃあなはありのままのにいさまがいちばん、だいすきですから」
こんな言葉でフェルハントの何かが変わる事はないと分かっている。
それでも、何か無理をしているなら、それを抑えないでほしいと思っている者がいるという事を知っていてほしい。
きっとそれだけでも、心の負担が減るとは思うから。

「変な事を言うね、フィアナは。
僕は何も抑えてないよ？　でも、そうだね――。
フィアナが僕を心配しているという事だけは、肝に銘じておくから。
だからそんな悲しそうな表情は、しないでほしいな。　ね？　僕のお姫様――」

困った表情を浮かべつつも、そっと慰めるように私を抱きしめるフェルハント。
その手は優しく私の頭を撫でていた。
一体どっちの方が年上なんだと思いながらも、おずおずとフェルハントの背中に回せる範囲で手を回す。
そして胸に顔を強く押し当てた。
これなら情けない今の私の表情を、フェルハントに見られる事はないから。
だから今は何も言わず抱きしめていて欲しい。
私が私を、制御出来るまで――。

◆2―6

「にいさま。ふぃあなはにいさまがえらんでくれたごほんのおはなしがききたいです」

何とか自分の感情を整理して、ふと我に返ればなんとも恥ずかしい居た堪れない状況になっていて。
相変わらずフェルハントは優しく私の頭を撫でていて――時折、髪を梳いていたりもしていたみたいだけど。
そんな状態のフェルハントが自分から進んで私を放す事も、他の行動をする事も決してない。
ただ私が落ち着くまで、安心したと彼が納得するまで放れないのだ。
だから私が何らかの行動を起こさない限り、何時まで経ってもこの状態のままとなる。
何時までもその状態でいられるほど私の神経も図太くない。
それに、目の前に置かれた本の事も気になったのもあって声をかけた。

「ん？　そうだね。フィアナが聞きたいなら喜んで読むよ」

私が落ち着いたと確認出来たのか――何時も私から声をかけるパターンだけど――抱きしめていた腕を外して、表紙を開けた本を二人の間へそっと移動させた。
言うまでもなく、私にはそれがなんて書いてあるのか全く読めない。
私はちょっと居住まいを正した。
だって態々読んでくれるというのだから、そこはやっぱり、ねぇ？

「それはいったい、なんのおはなしなのですか？」
「これはね。この世界の始まりのお話だよ」

「せかいのはじまり・・・・・・」

なかなか素晴らしいチョイスをする。
実際この世界がどういった名前なのか、それどころか自分が住んでる国名すらも知らないんだから、ありがたい。
ただ間違いなく子供向けだと思う。
態々私に読み聞かせるのだから、難しい専門的なものを選ばないと思うし、第一読む人間も子供なんだから。
昔話で絵本の類なんじゃないだろうか。
得られる情報なんて限られるものになるだろうけど、それでも何も知らない事に比べると遙かにマシだ。

「自分が住んでいる世界の事を知っていて損はないからね。
それにこれから勉強していく上での原点にもなるからね。だからこの本を選んだんだよ」

選んだ理由を丁寧に説明してくれる。

「ありがとうございます。さすがにいさまです」

素直に感謝の意を述べた。
六歳にしてこの考え。やっぱりフェルハントは頭がいいんだろう。
試しに自分の六歳の頃を思い浮かべたが、比較対象にすらならなかった。
微妙にダメージを受けつつ、読んでもらう体勢を作る。
作るといっても、ただ顔を本へと向けるだけなんだけど。

「そんな対した事じゃないけど、フィアナに褒められると嬉しいね」

そうしてふんわりと微笑んだフェルハントは、本を私が見やすい

ように移動させると朗読を始めた。

『むかしむかしのおはなしです。

このせかいにはすべてのはじまりのもと。
せかいをつくりしもの。
げんしょのおうとよばれるふたごのかみさまがおりました。
しょうねんのすがたをしたかみさま。
なまえを『えるはーべんと』といいます。
しょうじょのすがたをしたかみさま。
なまえを『ふぁいあーり』といいます。

せかいにはこのふたごのかみさまだけでした。
このふたごのかみさまはとてもとてもなかがよく、なにをするにもいっしょでした。
そんなふたりがすごすせかいには、つねにひかりがみちあふれておりました。
それはそれはとてもすてきな、すばらしいせかいだったのです。
ふたりはいつもなかよく、いっしょにすごしておりましたが、あるひ、ふぁいあーりがいいました。

『せっかくすてきなせかいなのだから、ふたりだけですごすなんてもったいないわ』
『そうだね。だれかがいれば、もっとたのしくなるよね』

えるはーべんともふぁいあーりのことばにうなづきました。
そんなふたりのおもいが、せかいにへんかをもたらしました。
ふたりしかいなかったせかいに、いつのまにかちいさなりゅうがあらわれました。

りゅうはいつしかおおきくせいちょうし、かずをふやしました。
りゅうのせいちょうに、かみさまたちはたいへんよろこびました。
そしてつぎに、せいれいたちがすがたをあらわしました。
せいれいたちはいろいろなすがたをしておりました。
そしてもっているのうりょくも、みなそれぞれちがったのです。
そんなせいれいたちは、せかいにいろどりをつけ、へんかをつけました。
ひびちがうかおをみせるせかいに、かみさまたちはまたたいへんよろこびました。
かみさまたちがよろこぶと、りゅうもせいれいもしあわせをかんじました。
なにせりゅうもせいれいも、じぶんたちをつくってくれたかみさまのことがだいすきだからです。
りゅうとせいれいとともにしあわせにすごしていたかみさまたちでしたが、このせかいをもっとすてきなものにしようとかんがえておりました。
そうしてさいごにひとをつくったのです。

ひとはりゅうほどおおきくちからもなく、せいれいほどせかいにみちあふれているちからをつかうことはできませんでした。
そしてじゅみょうもりゅうとせいれいにくらべるとはるかにみじかかったのです。
そんなひとに、ふぁいあーりはなげきかなしみました。
じぶんのちからがたらなかったせいだと、ふぁいあーりはじぶんをせめました。
ふぁいあーりのなげきかなしむようすに、えるはーべんともりゅうもせいれいも、そしてひともおなじようになげきかなしみました。
そのなかでもひとは、じぶんのそんざいこそがわるいのだと、よりいっそうじぶんをせめました。

でも、ひといがいはだれもひとのそんざいをせめることはしませんでした。
なぜならひとも、かみさまにあいされてうまれてきたそんざいだからです。
そんなそんざいをいとしくおもうことはあっても、きらいになることはありませんでした。
しかしひとはそうではありませんでした。
じぶんがいなくなればふぁいあーりも、そしてほかのものたちもかなしませることはないとおもったのです。
いままでどおり、たのしく、うつくしいせかいで、なげくことも、かなしむこともなく、みんながしあわせにくらせるとおもったのです。
だからひとはけつだんしました。

じぶんのそんざいをけすことに。

きえることはこわいことだとおもっていましたが、みんながしあわせになるならそれはけしてこわいことではないとおもえたからです。
かみさまにつくってもらったいのちをむだんでけしてしまうことだけは、こころをたいそういためましたが。
そしてひとはこうどうにうつしました。
しんちょうにきをくばって。
ひとのけいかくは、さいわいといっていいのかわかりませんが、ほかのだれにもきづかれませんでした。
ひとはあんどのきもちと、これからむかえるおわりにふるえながらも、じぶんでじぶんのいのちをけしたのです。
ひとのいのちがきえようとしたとき、ふぁいあーりはひとのけはいがないことに、はじめてきづきました。
いままであたりまえにかんじることができたけはいが、いきなり

きえたのです。
まさかと、ふぁいあーりはおもいました。
そしてひとのすがたをひっしにさがしました。
ふぁいあーりのようすに、えるはーべんともりゅうもせいれいも、ひとのすがたがないことにきがつきました。
そして、おなじようにひっしにさがしました。
そんなみんなのどりょくもむなしく、みつかったのはつめたくよこたわっているひとのからだだけでした。
からだをゆすっても、こえをかけても、なまえをよんでも、うごくこともへんじをすることもいっさいありませんでした。
ただそこには『ひと』のぬけがらがあるだけでした。

ふぁいあーりは、つめたくよこたわっているひとのからだをだきしめました。
そしてただただ、なみだをながしていました。
えるはーべんとも、りゅうもせいれも、かなしそうにふぁいあーりとそのうでのなかで、まるでねむっているようにみえるひとをみていました。
せかいはかなしみにつつまれたのです。

『どうしてこんなことに・・・・・・』

それはいま、ここにいるすべてのものたちのおもいでした』

◆2―6（後書き）

ひらがなばかりで、たいへんよみづらくなってます。
すみません。

◆2―7

『ふぁいあーりのめから、はらはらとおちるなみだに、えるはーべんとはけつだんしました。
おちつかせるようにやさしく、ゆっくりとふぁいあーりにいったのです。

『だいじょうぶだよ。ぼくがなんとかするから』

えるはーべんとはひとのからだを、ふぁいあーりからじぶんのうでのなかへといどうさせました。
そしてじぶんのちからをひとへと、ゆっくりとうつしていったのです。
そのこうどうにふぁいあーりも、りゅうもせいれいもおどろきました。
そんなことをすれば、えるはーべんとのいのちのちからがよわまってしまうからです。
みんなのおどろきをよそにえるはーべんとは、じぶんのちからをひとへとそそぎつづけました。
いままでおどろいてただみているだけだったふぁいあーりは、はっとわれにかえりました。
えるはーべんとだけにやらせるわけにはいかないと、そっとひとのからだへふれ、おなじようにじぶんのちからをそそぎはじめました。
それにはえるはーべんとも、りゅうもせいれいもおどろきました。
なにせふぁいあーりは、えるはーべんとにくらべるといのちのちからがよわかったからです。

『ふぁいあーり、だめだよ』

えるはーべんとがやめるようにいいました。
しかしふぁいあーりはやめようとはしませんでした。
それならばと、りゅうとせいれいもひとにちからをそそごうとしました。
しかしこんどはふぁいあーりにとめられました。

『あなたたちはだめ。これいじょうだれかがいなくなるなんて、たえられないから』

そうかなしそうにいって。
りゅうもせいれいも、ふぁいあーりのかなしむかおをこれいじょうみたくなかったので、しかたなくあきらめました。
かみさまたちはゆっくりと、ひとのからだのすみずみまでいきわたるようにちからをそそいでいきました。
りゅうもせいれいも、かたずをのんでみまもっています。
しばらくして、うごかなくなっていたひとのからだが、ぴくりとうごいたようにかんじました。
そのことにあとおしされたのか、さらにかみさまたちはひとにちからをそそぎます。
どれぐらいのじかん、ちからをそそぎつづけたのか。
あかるかったせかいがくらくなってきたので、そうとうなじかんがたったのはまちがいありませんでした。
かみさまたちにも、ひろうのかげがみえてきました。
それでもかみさまたちはあきらめることなく、こんきづよくひとへとちからをそそいだのです。
そして、まちにまっていたしゅんかんがやってきました。
かたくとじられていたひとのめがゆっくりとあいたのです。
とじられていたひとみには、いまはかみさまたちのすがたがうつ

っています。

『えるはーべんとさま。ふぁいあーりさま。どうして・・・・・・？』

ひとはいのちをとりもどしました。

でもそのかおは、こんわくしていました。

みんなのために、じぶんをけしたのにどうしてとおもったからです。

そんなひとにえるはーべんとはいいました。

『きみがいなくなるひつようはないんだ。きみはたしかによわいかもしれない。それでもぼくはきみにいきていてほしい』

『わたしがあなたをおいつめてしまったのね。ごめんなさい。でも、わたしもえるはーべんととおなじようにあなたにはいきていてほしいの』

ふぁいあーりのことばにつづくように、りゅうもせいれいもいいました。

『きみがきえることはない。いきてしあわせをかんじるだけで、それだけでみんながしあわせだから』と。

そのことばにひとは、なみだをしずかにながしました。

とめどなくながれつづけるひとのなみだをそっとぬぐい、ふぁいあーりはいいました。

『あなたにおねがいがあるの。このせかいをもっと、みんながえがおですごせるすてきなせかいにしてほしいの』

ふぁいあーりのねがいをひとはことわることはありませんでした。
それどころかよろこんでとさけんでいたのです。
そのひとのすがたにあんしんしたのか、ふぁいあーりはちいさくほほえむと、めをゆっくりととじていきました。
そしてそのままうしろへとたおれるすんぜんに、えるはーべんとがだきとめました。

『ふぁいあーりさま？　えるはーべんとさま？』
『なにもしんぱいすることはないよ。すこしつかれてねむってしまっただけだから。だからすこしのあいだ、ぼくたちのいえにもどるね』

えるはーべんとのことばにひとはまた、じぶんのせいだとおもいました。

『ちがうよ、きみのせいじゃない。ぼくたちもたまにはふたりでのんびりしたいからね』

それでもひとの、じぶんをせめるこころのこえはきえませんでした。
そんなひとのようすに、えるはーべんとはいたずらをおもいついたようなこどものかおでいいました。

『きみにはふぁいあーりのおねがいをまもってもらわないといけないんだよ？　いつまでもそんなくらいかおしないでいてほしいな。
それにぼくたちはきみにじぶんをせめてほしくて、よびもどしたわけじゃないんだよ？
りゅうもせいれいもいったように、きみがしあわせをかんじてくれるだけで、ぼくたちみんなうれしいのだからね。
そうそう。きみのなかにはぼくとふぁいあーりのちからがなが

れている。きっとちかいしょうらい、ぼくとふぁいあーりにたこどもができるよ。
　そのこたちのためにも、きみにもいや、きみたちにもまえをむいてがんばってもらいたいね。
　しんぱいしなくても、ふぁいあーりがおきたらすぐにあいにいくから』

えるはーべんとは、りゅうとせいれいとひとにそうやくそくすると、ふぁいあーりをそっとだきあげました。
そして、りゅうとせいれいとひとをあんしんさせるようにほほえみました。
りゅうとせいれいとひとはえがおにこたえることもなく、しんけんなひょうじょうで、えるはーべんととねむっているふぁいあーりをただじっとみてました。
それはまるで、わすれないようにじしんのなかにきざみこんでいるようにも、なくのをこらえているようにもみえました。

『それじゃ、げんきでね』

えるはーべんとが、りゅうとせいれいとひとにわかれのことばをつげました。
そのことばとどうじに、えるはーべんとのからだからまっしろいひかりがあらわれました。
とつじょあらわれたひかりはおおきくなって、えるはーべんととふぁいあーりをつつみこみます。
かみさまたちをつつみこんでいるひかりは、とつじょつよいひかりをはなちました。
そのひかりはせかいをまっしろにかえるほど、つよいものでした。
あまりにもつよいひかりだったため、りゅうもせいれいもひともおもわずめをとじてしまいました。

つよかったひかりも、じかんがたてばじょじょによわまっていきました。
ひかりがじょじょにきえて、なくなっていくのをかんじるとめをそろそろとあけました。
そしてあけたさきには、もう、えるはーべんととふぁいあーりのすがたはなかったのです。
かみさまたちはひかりとともにきえて、いえ、おうちにかえっていったのです。
のこされたりゅうとせいれいとひとは、しばらくのあいだたたずんでいました。
そしてだれからともなくいいました。

『きょうりょくしてせかいをつくろう』

りゅうとせいれいとひとはちかいました。
みんながえがおですごせるせかいを。
ふぁいあーりのねがいをかなえるために。
えるはーべんととのやくそくをこころまちにして。
それはいつになるか、わかりません。
それでもりゅうもせいれいもひともあきらめることも、うたがうこともしませんでした。
かみさまはうそをいわないからです。

りゅうもせいれいもひとも、またえるはーべんととふぁいあーりにあえるのをたのしみにまいにちをいっしょうけんめいいきていました。
ときにはつらいことも、かなしいことも、たくさんありました。
それでもよわねをはくことはけしてせず、たがいにてをとりあってせかいをつくっていったのです。

そうしていまのわたしたちのせかい『いりすてぃにあ』がつくられたのです』

パタンと、静かに本が閉じられた。
その音で話が終わった事に気付いた。
思いの他、集中していたらしい。

「気に入らなかった？」

フェルハントが窺う様に聞いてきた。
珍しい。彼がそんな態度を取るなんて。
常のフェルハントなら『ちょっとフィアナには難しかったかな？』
なんて微笑みと共に聞いてくる筈なのに。
一体どうしたんだろうか？
もしかして、聞いていた私の態度が何かまずかったのだろうか？
だったら、この態度も頷ける。
そうと分かれば、フェルハントの誤解を解かなければ。
折角読んでくれたというのに、嫌な思いをさせてしまっては申し訳ない。
私は慌てて言葉を紡ごうとした。
しかし、その前にフェルハントが私の頭を慰めるように撫でてきたので、言葉は音になって外に出る事はなかった。
一体どうしてこの行動？
さっきから予想がつかないフェルハントの行動に、困惑してしまう。

「フィアナには悲しい顔は似合わないよ」

悲しい？　そんな表情をしたつもりも、気持ちもないんだけど・・・・・。

「このお話は悲しい話じゃないから。だから、ね？　笑ってほしいな。
僕はフィアナの笑顔が大好きだから」

フェルハントがそこまで言うのなら、やはりそういう表情を浮かべているのだろう。
でも、本当にそんな気持ちはない。鏡でも見れば納得するけど。

「にいさま。ふぃあなはそんなかなしそうなかおをしているのですか？」

念の為に尋ねる事にした。
フェルハントはまさかそんな事を言われるとは思わなかったらしく、それまで撫でていた手を止めると僅かに驚いた表情で、私の顔をマジマジと見た。
その驚きように、そこまでの表情なのかと逆に思ってしまった程だ。まるで凝視するかのような視線に、いや、そんな見られても何も変わりませんけど。なんていう言葉を自身の中で呟きつつ、私もお返しとばかりにフェルハントをじっと見た。
それは、私は私でフェルハントの表情を見逃さないようにする為だ。じっと見つめ合っていると、フェルハントの方が根負けしたらしい。

「そっか。フィアナは悲しかったわけじゃないんだね。
どうやら僕の勘違いだったみたい。ごめんね？」

本当は勘違いじゃないのだろうに、苦笑を浮かべながらフェルハントは私に心配をかけないように自分の間違いだと言った。
そこまで気を遣ってもらわなくても大丈夫なんだけどなぁ。
でもそんな事を言ってしまうと、またフェルハントが気を遣ってし

まうだけだと分かっているから何も言わないけど。
本当は笑顔でも浮かべて安心させるべきなのだろう。
でもそれだけではこの雰囲気は払拭されないと思うから。
だから私は視線を本へと移した。

「にいさま。いまのおはなしなのですが、わからないことがあるのでおききしてもいいですか？」

これ以上その話題に触れる事はせず、ただ話が気になるという素振りを見せた。
とりあえず「うーん」と眉根を寄せて、考えている表情も作っておいた。
実際色々と気になる事はあったので、けして嘘ではない。
行き成りの話題転換だったが思ったほど不自然さはなかったようで、フェルハントは先程までの苦笑を拭い去ると「もちろん」と優しく頷いてくれたのだった。

◆2―7（後書き）

はてしなく長いものとなってしまいました。すみません。
おはなしのひらがながかなり読みづらいとは思いますが、ご理解いただけますとありがたいです。

◆2―8

フェルハントの了承を得られたので早速、本の話について質問する事にした。
実際聞いていて、色々と突っ込みどころがあったのよね。本当に沢山。
話を遮るのも悪いと思ってそのまま黙って大人しく聞いていたのだけど、折角質問の機会を与えてくれたのだからここは大いに有効活用させてもらおう。
さて、まずはどの質問にしようかなって思ったんだけど……。
ここで今更ながらに気付いてしまった。

――三歳児の思考というのがよく分からない。

思わず項垂れてしまう。
だって三歳児が一体何を疑問に思うのかが、分からない。
不自然でない質問をするべきだろうと分かってはいるのだけど、子供、それも三歳児が疑問に思う事なんて正直考え付かない。
だって子供よ？
自分が大人になって客観的に子供を見た時の、あの不思議な行動の数々。
正直、理解不能――不可解。
子供独自の思考パターンって、大人になると理解出来なくなると思うのよね。
そう思っている以上、子供の、ましてや幼児と言える三歳児の思考なんて想像できるはずもなくて。
しかも、質問する相手は六歳なんだよねぇ。
余計下手な質問なんかできやしない。
これが素のままの私で質問が出来るなら、聞きたい事は山ほど出て

くるのだけど。
例えば、この話の対象年齢は何歳からなのかとか。
私はてっきり絵本が出てくるのだと思った。
実際フェルハントが持ってきた本は厚みがあったので、話はある程度の長さで挿絵がついていたらこれぐらいの厚さも当たり前だろうと思っていた。
でも、ページが捲られる度出てくるのは文字ばかり。
一体何時絵が出てくるんだろうと思いながらも、話を聞きつつ本を見ていたら終わっていた。
文字が分からない人間には勧めるべき本ではないと思う。
ただ、見せて楽しませるものじゃなく、読み聞かせる専門だとしたら問題はないけど。
ないのだけど、それなら何故今そのチョイス？　って思う。
読み聞かせるのって普通、寝る前とかになるんじゃない？
本を直接見るのは、朗読する本人だけでそれ以外の者は聞き役にまわるわけだから、態々今である必要はないと思うのよね。
この世界に絵本なんていうものがなかったら、それは仕方ない事なんだろうけど。
今の私の状況じゃ、この世界の文化や慣習を知る事なんてできないし。
絵本があるかどうかなんて、それ以前に『絵本』という物があるのかどうかも分からない。
とりあえず絵本については、また今度調べる事にして、次に話の内容――。
この世界についてって言ってた気がするんだけど。

神――創造主。

別に、おかしいとは思わない。
私が結歌として生きていた世界にもあった事だもの。

神々については日本神話に始まって、ギリシャ神話に北欧神話、メソポタミア神話にインド神話……。
あげだしたらキリがない。
それに架空小説から派生したクトゥルフ神話っていうものあったし。
とにかく、それほどまでに『神』という存在がここでも本になっていたとしても不思議ではない。
例えその中にリュウや精霊という言葉が入っていたとしても。
天使がリュウに変わったとでも思えば別に違和感は……ない、はず。
要するにこの世界の神の眷属という事だろうし。
そう考えれば、すんなりとはいかないまでも十分納得は出来る。
そこまでは別にいい。理解できると思う。
でもね、何故敢えて今このタイミングでその話を選んだという事に関しては申し訳ないけど、理解が出来ない。
だって、幾らこの世界の事だと言われても三歳児に例えて言うなら古事記が、日本書紀が理解できる？
まあ、百歩譲って単純な内容に変えていたとしてもちょっと考えられない。
本を選んだのが子供だと考えたとしても。
中身が大人な私にはこの話自体、理解出来ない事はないんだけど。
だからこの内容について疑問点があったとしても、質問なんか出来ないと思う。
いや、出来るとすればとても単純な、言葉通りのものだけ。
やっぱりそれが妥当、なのよねぇ……。
ああ、もうっ！
一体何を質問すればいいのか、分からなくなってきた……。
ぐるぐると答えの出ない思考に、思わずガーッって頭を掻き毟りたい衝動に駆られたけど、なんとかそれを押しとどめる。
流石に唐突にそんな行動したら、フェルハントが驚くだろうし。
第一、私の質問をずっと待っていてくれてるんだからそろそろ質問しないと。

とりあえず、素直な質問でもしてみる事にしよう。

「りゅうたちは、かみさまにあうことができたのですか？」

「残念ながら、まだみたいなんだよ」

淀みなくスラスラと答えてくれるフェルハントの瞳には、ほんの少し悲しみの色が宿っているように見えた。

それは『会う』という約束が果たされなかった、リュウ達への同情心からなのだろうと思った。

思ったんだけど、なんかおかしい。

もう一度フェルハントの言葉を思い出してみる。

確か『まだ』って言ってた。――まだ？

それって、約束はまだ生きているって事？

「それは、いつかかならずあうことができるということですか？」

まさかとは思いつつも聞いてみると、フェルハントは勿論と逡巡する事なく頷いた。

「僕達『ヒト』はもうその約束を覚えていないけど、竜や精霊達の中にはまだ覚えている者達がいるからその約束は必ず果たされると思うよ。

ただし、それが何時になるかはわからないけどね」

え？　ちょっと待って……。

今サラリと凄い事言われた気がするんだけど……？

「りゅうやせいれい、かみさまはじつざいするってことですか……？」

「うん、勿論」

即答するフェルハントに思わず「わぁお、ファンタジー」なんて言葉を、まるで台本の台詞を棒読みする大根役者のように呟いてしまった。
それほどまでに、衝撃を受けてしまったのだ。
今更ながらに、あまりにも違いすぎる世界に。
幸いな事に私の呟きはフェルハントには届いていなかったらしく、それどころか「ああ、そういえばフィアナはまだ見た事がなかったよね。だったら仕方ないかな」と一人呟くと、
徐に立ち上がり、私に言葉をかける事もなく何処かへと歩いて行った。
私はそんなフェルハントを珍しいと思いながらも視界の端で見送り、今の間に動揺する心を落ち着かせる事にした。
まさかリュウや精霊が普通に存在しているなんてね。
思いっきりファンタジーだし。
いや、既に私が此処に存在している事自体がもうファンタジーだった。
このファンタジーがこの世界での普通なら、私も慣れなきゃいけない。
なんていうか、上手くやっていけるか不安要素が増えた気がする。
ファンタジーの世界に憧れたりはしたけど、それは「想像していて楽しい」「害がない事」が条件だったりするわけであって、日常に溶け込まれると実際は複雑。
なまじ中身が大人だから、柔軟に受け止められる無垢さがねぇ……。
はふー。と疲れきった溜息が自然と零れ落ちた。

「ちょっと疲れちゃったかな？」

いつの間にか戻ってきたフェルハントが、心配そうに私を見た。
あちゃー。

没頭しすぎて全然気付かなかった。
そこまで精神的ダメージ受けてたって事……？
根底たる世界観の違いは思った以上に、私の精神を揺さぶっていたのか。
とりえず自分の内面の事はあとにして、上辺だけでも取り繕わなきゃね。

「そんなことないです。それよりにいさまはどちらへいかれていたのですか？」

これでトイレって答えだったら本当にごめんって感じだけど。
でも話題を逸らす為には必要だから、そこはもう子供だからという事で許してもらうしかない。

「フィアナが竜や精霊を見た事がなかったからね。絵姿を持ってきたんだよ」

そう言ってフェルハントは装丁の綺麗な一冊の本を机の上に静かに置いた。
その本も先程の本と同じぐらいの厚さがあった。
絵姿というぐらいだから、今度こそ絵がついているのよね？

「精霊に関しては姿がそれぞれ違うから余り参考にならないけど、竜は基本的に同じ様な姿だからね」

フェルハントは本をパラパラと捲ると、リュウが載っているページを開いた。
どういうものかとちょっとワクワクしながら見てみると、そこには丁寧に細部まで描かれているリュウの全身図が載っていた。
ちゃんとカラーで。

これ、リュウっていうかドラゴン……。
大きな二枚の羽を背中から生やし、先が細くなっている尻尾に四本の手？　それとも足？　がありその先には鋭い爪が生えていた。
身体はどっしりとしており些か長い首に、頭には角か瘤か分からないけど小さいものが二つほど左右についている。
例えて言うならプラキオサウルスの首を少し短くして、ちょっと強面の表情にすると近い、かな……。
表現が難しい……。
色は、全身蒼色みたい。爪とかは白で目の色は紺？
リュウっていうとどうしても東洋の龍の方を思い浮かべちゃうけど、この世界の竜はドラゴンの事なんだね。
しっかし、これが――これって言い方失礼か――竜が普通に存在しているのか。
大きさの比較が書かれていないからどれぐらいの大きさか想像はできないけど、外にはいるのよね？
私、実物に出会って気絶したりしないかどうか心配になってきた。
それに、人を襲ったりしないのだろうか？

「にいさまは、りゅうやせいれいをじっさいにみたことがあるのですよね？」
「うーん、そうだね。精霊は見た事があるよ。でも竜はどうやら数が少ないらしく、残念ながら実物はまだ出会った事がないんだ」

だったら竜は実在してるかどうか分からないのでは？　と、思ったんだけど、毎年目撃報告がちゃんと挙がっているらしく実在は確認されているとの事。
その報告が虚偽の可能性はないのかと聞いたら、精霊の証言が必須だから虚偽は出来ないらしい。
うーん……。精霊は嘘がつけないって事なのだろうか？
思わずうーっと唸って考えていたら、「精霊や竜についてはこれか

ら勉強していけばいい事だから、今は何も考える必要はないよ」と、あやすように頭をポンポンと撫でられた。
そこまで言われるとこれ以上考え込んでしまうのも、憚れてしまう。今後の楽しみとしておいておくとするかと、意識を切り替える事にした。

「さあ、時間も遅くなってきたからね、今日はもうお終いにしよう」

キリがいいと思ったのだろう、フェルハントは本を閉じた。
まだ聞きたい事はあったけど、確かにもうそろそろ夕食の時間だろうし、ここでごねても仕方がない。
それに困った事に子供の身体は睡眠をかなり必要とするらしく、夜遅くまでは起きていられないのだ。
だからと言って無理して起きておくつもりはないけど。
だって成長阻害になったら嫌だし。
なんでそんな事を気にしているのかって言うと……。
どうせやり直し？　させられているんだから折角ならナイスバディな女性になってみたいじゃない？
夢は高く大きくってね。
遺伝っていうものにも大きく左右されるだろうけど、この世界の両親と兄を見ていると努力次第では実現出来そうなのよね。
だから……。
そういう目標でも持っておかなきゃやってられないっていう思いもあったりはするんだけどね。
とにかく、規則正しい生活を習慣付けるところから始めるの。
頭の中も切り替えて、考える事はまた明日にしてリラックスさせなきゃ。
うん！　と変に気合を入れながら椅子から降りようとしたら、ヒョイッと抱えあげられた。
それは言うまでもなくフェルハントによってで。

「それじゃあ、行こうね」
「むー。にいさま、ふぃあなはじぶんであるけます」
身体を動かす事も大事なんだから、邪魔はしないで欲しい。
怒っている事を意思表示する為に、目に力を入れてキッとフェルハントを睨む。
私の睨みを真っ向から受けたフェルハントは、悲しそうな表情を浮かべた。
「フィアナは僕と一緒に居るのが嫌なのかな……」
寂しそうに言われてしまうと、些細な事で怒っている自分が凄く小さな人間の様な気がして、それ以上怒る事も出来ない。
それに相手は自分より子供なのだ。
だったら、此処は私が折れるべきだろう。
「ふぃあなはにいさまといっしょにいるの、好きですよ？」
仕方ないなぁと思いながらも言えば、途端にギュッと強く抱きしめられた。
「ありがとうフィアナ。僕もフィアナが大好きだよ」
そう言って優しく額にキスを一つ落とした。
相変わらず感情表現が大げさだなあと思いはしても、全く嫌な気がしないのは掛け値なしの愛情を注がれているからだろう。
未だに戸惑う事は多々あるけど、頑張って生きていこうと思えるのは、温かい愛情を注いでくれる家族がいるから。
間違いなく私はこの家族に、フェルハントに救われていると思う。

フィアナの中に結歌がいるという事は伝えられないけど、その事にほんの少し胸が苦しくなるけど、家族を大事にしようと思う。

「ふぃあなもにいさまがだいすきですっ！」

大切にしたい想いが少しでも伝わればいいと、ありったけの笑顔でフェルハントに微笑んだ。

結果――感極まったフェルハントに危うく抱き潰されそうになったけど。

それも愛情ゆえと分かっているから、何も言えないんだけどね。

◆3―1

燦然と頭上で、自身の存在を誇示するかのように輝きを放っている太陽。
その太陽の姿を隠す雲はなく、それどころか一つも空には雲の姿は見えない。
見事に澄み切った青空だ。
どこまで繋がっているのだろうと思うほど、青空には終わりなど一切見えず。
ともすれば、手を伸ばせば触れられると思うほど空は近く眼前に広がり、だがけして触れる事は適わない。
そんな錯覚を感じられる程空は見事なまでの、青一色となっていた。
空に気を取られていればそよそよと優しく、まるで肌を撫でるように吹いている風。
その優しさから、自分に気付いて欲しいと主張しているように感じてしまうからどこか不思議だ。
太陽の存在で暖められていてもおかしくないのに、ほんの少しだけひんやりと冷たい空気を孕んでいる風は、何者にも汚された事がないのだろう。
清浄な空気の中に、緑の、自然の匂いを多分に含んでいた。
空から風へと意識を移すと、必然的に目に入ってくる瑞々しい緑。
若木だろうか。
太陽の光を存分に浴びて自身の枝葉を縦横無尽に伸ばしているその様は、生き生きとした表情で今ある生を謳歌しているように見えた。
まるで生まれ出でた事に喜びを全身で表している様だ。
そんな若木を中心に周囲を占めているのはどうやら草花や木等の自然のみで、人工物など欠片も見当たらない。
自然に出来たのであろう花畑は小さく可憐な花が色とりどりに咲いており、その可愛らしく咲き誇る様は間違いなく見る者に癒しを与

える。
小さい可愛らしい花々はそよそよと風に揺れ、まるで会話をしているようだ。
人工ではないからこそ与えられるその癒しは、自然の恵みだろう。
何者にも手が加えられていない、いや、恐らく誰もこの場所に来た事はないのではないだろうかと思わずにはいられない程、全てがキラキラとして、この世界が輝き満ち溢れている。
――ここにいる生あるものは、生きている事に喜びを感じ、讃歌し、他者を愛し慈しみ、その生を精一杯生きているのだ。
だからこそ、ここはこんなにも穏やかで優しい。
温かく穏やかな自然に囲まれ、緩やかな時を全身に感じた。
まあ、それはそれとして、だ。

「ここ、一体何処なのよ……」

胸中を吐露するかのように思わず零れ出た言葉。
小さな草花の自然の絨毯の上に、気が付けば仰向けになって寝転んで空を見上げていた。
目が覚めれば身に覚えのない場所にいたので、少なからず驚きはしたもののそれ程慌てていなかったりする。
多分、いやこれは間違いなく夢なのだ。
記憶をほんの少し遡れば、夕食後入浴しそれから素直にベッドで就寝した記憶が容易く思い出されたから。
だから夢だと簡単に思う事が出来た。それに……。

「姿が前の私だし」

ゴロンゴロンと数度寝転がれば気が付いた違和感。
確認の意味を篭めて手を空へと翳すと、意味なくグーとパーを繰り返した。

私の意志通り動く手は間違いなく私の、三歳児であるフィアナではなく以前の――――椎名結歌であった私の手だった。
右手の甲にある小さな黒子は結歌にしかなかったし、手の大きさも大人のものだ。
風に遊ばれるようにたまに揺れている髪は黒色だし……。
それに服装も、Tシャツにジーパンという前の世界の服装だ。
実際鏡で自分の顔を確認していないから『間違いないか？』って聞かれると絶対とは言い切れないけど。
それでもフィアナの姿をしていない以上、幾つか見覚えがある点から想像するなら私は以前の私としか答えを導き出せない。
これで全然違う容姿でしたってなると、どこへ突っ込んでいいのか分からない。
いや、夢だからなんでもありか……。
――――夢、よね？
これで夢じゃありませんなんて言われた日には、本当立ち直れないわよ。
思わず辿り着いた考えに慌てて頭を数回横に振った。
嫌な思考を振り落とすかのように。
何時までもじっとしているから、変な考えが思いつくのよ。
ここは何も気にせずに、とりあえず夢を堪能する事にしよう！
私はそう決めると、勢いをつけて起き上がった。

「さぁ！　レッツ冒険ター……」

イムと続くはずの言葉は、残念な事に音となって紡がれる事はなかった。
ドキドキやワクワクといった楽しい気分は一気に霧散し、それどころか一歩、意気揚々と足を踏み出した格好で硬直をした。
なぜならば進行方向、距離にして五メートル程先に生まれてこのかた目にした事のない、それはそれは大きな生物がいたから。

一体何時の間に……。
よく気付かずに考えに没頭出来たものだと、自分を褒めるべきなのだろうか。
己の愚鈍さに頭を抱えたくなるところだけど、ここは出来たら目が覚めるまで気付かずにいたかった……！
目の前の生物はどうやら眠っているようで、二つの目は綺麗に閉じられている。
眠って、いるのよね……？
流石に起きているかどうかなんて調べる勇気は持ち合わせていない。
例えそれが夢の中であっても。
私は恐々と、目の前の大きな生物を観察した。
本当は脱兎の如く逃げ出したいけど、変に音を立てて目が覚められても困るし、ほんの少しぐらいなら観察してもいいよね？　なんてちょっとした好奇心が沸き起こったからだ。
見るからに固くびっしりと生え揃っている鱗に、四本の手足の先についている爪はそれぞれが太く、しかも鋭く尖っている。
爪も鱗同様固そうで、容易く折れる様な気がしない。
こんな爪で襲われたら、間違いなく一撃死だ。
固く閉じられている――と、信じたい――口の中は恐らく鋭い牙が生えているのではないだろうか。
鋭い爪を持っているのに歯が丸いなんてそんな事ないだろう。
だとすると、肉食？
確認出来ない為、絶対とは言い切れないが一生確認する事がなくても私は一向に構わない。
いや、それどころか謹んでご辞退申し上げる。
私は食料になる気など更々ない。
それが例え夢の中であっても。
目の斜め後ろ上にある、身体に似合わず小さな二つの耳は時折ピクリと動いているような気がするのは――――目の錯覚であってほしい。
そして頭の上にあるのは、瘤？　にしては形がおかしい気がするけ

ど、なんだろう、あれは？
そのまま視線を滑らせる様に背中へともっていけば、背中の上にこんもりと見えるあれは――――羽？　いや、翼なのか。
ちゃんと折りたたまれているみたい。
大きな身体をこじんまりと丸めて眠っている様は、見る人が見れば『可愛い』なんて言うかもしれないが、命の危機を感じずにはいられないこの状況ではとてもそうは思えない。
身体と同じ様に鱗で覆われている太い尻尾は、丸めている体の前にまるで投げ出されているかのように無造作に置いてある。
その余りにも無造作な様子に、尻尾は急所ではないのだろうか？
と、思わず心配してしまったほどだ。
そんな事を考えた自分に自身の命の方が遙かに危機的状況なのに暢気なものだと、苦笑を浮かべてしまったけど。
しかし、この姿……どこかで見た事があるのよね。
一体どこだったかなぁ……。
こんな全身金色の生き物、流石に一度見たら忘れられないと思うんだけど……。
うーんと考え込んでも金色の生き物なんか蛇ぐらいしか思い浮かばない。
系統的には似ていない事もないのかもしれないけど、残念ながら翼や羽は蛇には生えていない。
それ以前に手足がないけど。
第一、こんな大きさで翼が生えた生き物なんか、思い付くとしたら恐竜ぐらいしかない。
ん？　恐竜……？
その言葉に自分の中でカチリと何かが符号した。
色は違うけど、でも姿形は似ている。
最近見たアレに。
もしかしなくても、やっぱり……。

「竜？」

驚きと共に思わず声に出してしまったけど。
いやはや、まさか絵姿を見せてもらったその日に夢で見るなんてよっぽど印象深かったんだろうなぁって、人事じゃなく私自身の事だった。
でもなんで同じ色じゃなかったんだろう？
私の無意識下では、竜は金色じゃないと嫌だとでも思ってるんだろうか？
――なんて考えても仕方ないか。
だって夢だし。
しっかし、夢の中で夢について考えるなんて可笑しな話よね。
クスリと笑いつつ思考を中断して、意識を竜へと戻した。
戻したのだが……。
その視線はバッチリと、これでもかというぐらい見事に竜と合っていた。
嫌な事に。
瞬間全身に緊張が走る。
大きな二つの目はパッチリと開いておりその瞳は、肉食獣を思い出す――、例えるならライオンと言ったところか。
瞳の色は身体と同じ金色で、これが命の危機を感じないならもっとじっくりと見たいと思えるぐらい綺麗なのだけど。
な、なんで起きているのよっ！
さっきまで綺麗に閉じられていたのに！！
もしかして、さっきの私の呟きの所為！？
あー！　馬鹿馬鹿私の馬鹿っ！！
思いっきり自分を殴りたい心境に駆られたけど、今はそれよりこの危機的状況を打破する事にしないと。
そうして私が一人で焦っている事になんか気にも留めず、竜はゆっくりと起き上がりだした。

視線を一切逸らす事無く。
ここで少しでも視線を外してくれたら、全身に走る緊張は若干緩和されたのに……。
私は蛇に睨まれた蛙のように動く事など出来る筈もなく、ただ竜が完全に起き上がる姿を見ているしかなかったのだった。

◆3―2

じーっと一切逸らされる事のない視線に、私は動くに動けなかった。
呼吸をするのですら、細心の注意が要るほどに。
じっとりと嫌な汗が噴き出てきているのが分かるが、それを拭う事すら出来ない。
私の一挙手一投足が目の前の竜に刺激を与えてしまう可能性があるから。
だから私は動けない。
ツーと背中に伝う汗を感じながら、竜の視線を真っ向から受け止めていた。
心の中で早く目を逸らしてっ！！　と叫んでいたって私の心の声は竜に聞こえる筈もない。
だったら私から逸らせばいいのかと言うと、残念ながらそれは出来ない。
何故なら『肉食動物は視線を逸らした方の負けだ』と聞いた事があるから。
逸らしたら最後、襲い掛かられるのだ。
ん？　肉食動物じゃなく熊だったかな？
なんか記憶が曖昧だけど、今はそんな些少の事を気にしている場合なんかではない。
私の命が懸かっているのだ。
折角新しい人生をはじめたのに、こんなところで死ぬなんて生まれ変わった意味ないじゃないっ！！
と、心の中で叫んだのだけど……ん？
あれ、これって夢じゃなかったけ？
そう、夢よ、夢！
なーんだ。だったらそんなに必死にならなくてもいいわけか。
なんて思わず気を緩めそうになったけど、慌てて気を引き締め直し

た。
駄目駄目！！
例えこれが夢でも、バリバリと食べられて死にたくなんかないっ！
痛みを伴わないと分かっていても朝からスプラッタ、悪夢でお目覚めなんて絶対に嫌だ。
思わずしてしまった想像を、慌てて頭の中から叩き出した。
うー……。私スプラッタとかグロ系本気で苦手なのよね。
想像だけでも鳥肌が……。
思わず自分の両腕を擦りたくなったが、今はその動作すら命を危険に晒してしまうので自重する。
もう、とりあえずどこかに行くか目を逸らすかぐらいしてくれないかな。
一番良いのは私が目を覚ます事なんだけど、そう都合よく目覚める事が出来ないのよね。
これも俗に言うセオリーっていうやつだと思うけど……。

『何を一人で百面相をしているのだ』

突如、声が聞こえた。
静寂が――――嫌な緊張感が支配しているこの場所に。
本当に、突然、唐突に。
それでもこの静寂は破られる事はなかったが。
ここに私以外の人間がいた事に少なからず驚いたものの、だからと言って動けるわけじゃない。
こんな状況じゃなかったら、探したいところなんだけど。
勿論、交流を深めたいとかそんな理由なんかじゃない。
だって女性に向かって余りにも失礼な発言じゃない？
文句の一つでも言いたくなるわよ。
いやそれ以前に、竜に襲われそうになっているのに助けもしないって酷いんじゃない？

竜に敵いっこないからっていうのは分かるけど、それならせめて気を逸らすとかでもしてくれたらいいのに。
そうしてくれたら、脱兎の如く逃げ出すのに。
――逃げ切れるかは別として。
……。我ながら情けないけどね。

『・・・・・・返事なし、か。まさか声が聞こえぬと言うことはあるまい。
ならば、口がきけないのか？』

私が無言を貫き通した所為か、果てしなく斜めな言葉が。
独り言のようにも聞こえるけど、どこかで私のリアクションを待っている風も感じられた。
いやいやいや！
動けるものなら激しく手を横に振って、速攻否定の言葉を吐いただろう。
でもそんな事出来るはずがない。
この緊迫した状況が分からないとでも！？
人の顔を百面相だなんて失礼な事を言っておいて、まさかこの竜の姿が見えないなんてそんな馬鹿な事ないわよね。
竜は人の言葉が理解出来ないのか――耳が聞こえないっていう事はないと思うけど、一切動かないし。
申し訳程度についている耳も全く動いてないし――そういえば竜の耳は犬猫のように動くのだろうか？
なんて事を一瞬考えてしまったけど、今はそれどころじゃない。
相変わらずの膠着状態が続いている。
多分ここで僅かな変化――勿論声以外の――があれば、一気にこの膠着状態は崩れるだろう。
ただそれを誰が齎してくれるか、なんだけど。
勿論、私が自らなんてのは絶対ない。論外だ。

――ああ、私以外の誰かお願いします！
その願いが通じたのか、変化は突然起こった。
唯その願い一体が誰に通じたのか。
神か悪魔で言えば悪魔の方じゃないかと、私は思った。
心底、本気で思った。

――動いたのだ、竜が。

竜が首を前へと、ゆっくり私の方へと突き出してきたのだ！
わわわわわっ！！
膠着状態がなくなったのは良かったけど、出来れば竜じゃなく第三者の方が良かった！！
そうじゃないと私の生存確率が、格段に、もう本当に底辺を這うどころか突き抜けるんじゃないかと思うほど下がるっ！！
なんて事を考えてる場合じゃないでしょ！！
私は自身にを叱責すると、慌ててくるりと身体の向きを百八十度変えた。
そしてそのまま脱兎の如く駆け出す。
本来なら背後なんて見せたくないのだけど、スピードを求めるとなるとこれしか方法がなかった。
後ろ向きでなんて、こける可能性は高いわ、スピードは出ないわ、障害物は分からないわと、マイナス要素が高すぎるからだ。
背中から『がぶり』なんてやられたら一発でお終いだけど、今の私が出来る最善の方法なのだからやられたら諦めるしかない。
本当は簡単に諦めたくなんかない。足掻けるなら足掻きたい。
だけど、どう考えても体格差からして無理がある以上、諦めるしかないと分かっている。
だから万に一つの生存をかけて、今正しく『死ぬ気』で走っている

のだ。
その生存確率が一ミクロン、一ピーピーエムだったとしても。
『一体何処へ行くのだ？』
私の必死さなんて、微塵も分かっていないのだろうな。
疑問を滲ませた誰かの問いかけが。
いや、見たら十分に分かるでしょうにっ！
今回は黙っている必要性も無いので、半ば八つ当たり気味に叫んだ。
「見たら分かるでしょっ！　逃げているのよっ！」
『逃げている？　一体何から？』
不思議そうに聞いてくる声に、本気で殴り倒したいって私が思ったとしても仕方ないと思う。
いや、正当な行為だと言えるだろう。
私はその怒気を一切隠す事無く叫んだ。
「そんなの決まっているじゃないっ！　竜からよっ！！」
叫びすぎた所為か、喉に一瞬痛みが走った。
最悪っ！　と、心の中で悪態をつきつつも足を緩める事無く、唯只管前へと動かしていく。
まるで壊れた自動人形（オートマトン）の様に。
急激な全力疾走に身体は悲鳴を上げているが、それでも止まる事は出来ない。
それが、それだけが私が生きる為のただ一つの手段だからだ。
だが、その手段すらも失われた。
「ぐえっ」

急激に喉が圧迫された為に、思わず呻き声が漏れ出る。
一体何！？　と顔を息苦しさで顰めつつも、強引に顔を背後へと向けた。
目に映ったのは果てしなく鋭く尖った大きな爪。
それは紛れも無く、竜の爪だった。
――ああ、ここで終わりなのか。
未だギリギリと圧迫される喉に、自分の終焉を悟った。
このままいくと窒息死という事になるのだろうか。
酸欠になる頭でぼんやりとそんな事を考える。
身体はズルズルと、後ろに引っ張られていた。
竜が自分の方へと引き寄せているのだろう。
引き寄せた後、パクリと頭から食べるのだろうか。
このままだと間違いなく先に意識がなくなるから、食べられるとしたら好都合なのか？
半ば自嘲気味に浮かんだ考えは、突如消えた圧迫感と急に肺へと入ってきた空気に激しく咳き込んだ事によって掻き消えた。
ゴホゴホッと数度咳を繰り替えし、苦しみからか生理的な涙が目尻に浮かぶ。
それでも現状の確認をと視線を自分の後方へと向ければ、そこには僅かばかりに情けない顔をした竜がいた。
――情けない？
そんな事を思った自分に、首を傾げたくなった。
竜の顔は人間ほど、表情を豊かに表せる事は作りから言って難しいと思う。
なのに、どうしてそんな事を思ったのだろうか？
竜は私をじっと見つめたまま、動こうとはしなかった。
だがそれは先程までの緊迫した硬直状態のものとは、全く違うもので。
そう、雰囲気が、竜の瞳が違うのだ。

しいて言うなら私を気遣う雰囲気が滲み出ているという感じだろうか。
しかし何故……？

『すまぬ。そなたには苦しい思いをさせてしまったな』

また、あの声が聞こえた。
しかし、告げられた言葉の意味が分からない。

『人の身が如何に脆弱か知っていたのだが……。
口も聞きたくない程、怒ってしまったか』

明らかに落胆の色を滲ませた声に、疑問は未だに払拭されなかったが誤解をさせたままというのが些か居た堪れなかったので返答をした。

「別に怒っているわけじゃないわよ？
あなたに謝られる理由がないから、返答を窮したわけだし……」
『理由がどうあれ、そなたの首を絞めるようになってしまった事は事実。
謝罪をするのが当然だろう』

ん？　ちょっと待って？

「私の首を絞めたのって……」

まさかという思いで眼前の竜を見つめる。
その所為か、私の眼差しと竜の眼差しがピタリと合う。
逸らされる事のない視線に、無常にも言葉が紡がれた。

『ああ、我だ』
「って、え？　えっ？　えー！？」
『そう驚く事でもあるまい』

罰が悪そうにぷいっと逸らされた顔。
余りにも勢いがつきすぎたのか、小さい風が起こった。
いや、そんな事よりも……。
今の今までこの声は何処かにいる人が発していたのかと思っていたのに、まさか目の前の竜が喋っていたなんてっ！
あまりの事に私は唯、目の前の竜を凝視する事しか出来なかったのだ。

◆3―3

「ああ、なんてファンタジー……」

竜が喋るなんて予想していなかった展開に、思わず心の声が言葉となって漏れ出た。
この言葉もつい最近使ったような気がする。
それ程までに私の周りはファンタジーに溢れているって事なんだろう。
私の漏れでた声を拾った目の前の竜が――――意外に耳がいいらしい――――『どうした？』と目で訴えてくるから、慌てて首を振ってなんでもないと誤魔化したけど。
あー、もうっ！
夢だと分かっていても全てを甘受する事なんて、意外に出来ないものなのよね。
思わず遠い目になりながらそんな事を思う。
今更って感じもするけど。
はぁーと内心で大きな溜息を吐いた。
それはそれとして……。
私は一体、今からどうすればいいのでしょうか？
流石に何時までも、竜と向かい合ってご対面ー！！のままでは気まずいし。
いや、気まずい以前の問題なんだけどね。
何せ、何時『パクリ』なんて状況になるのか分からないから、出来るだけ早急にこの状況を変えたいのだけど……。
でも私からこの状況を変える事なんて、到底出来ない。絶対無理！
夢だと分かっていたって、下手したら震えそうになる身体をなんとか押しとどめるのだけで精一杯。
私は勇者でもないし、スーパーガールでもない。

ごくごく普通の一般人。ゲームで例えるならモブ。ドラマで例えるなら脇役いや、台詞すらない通行人、その他大勢ってところだ。
そんな私が自ら状況を変える事なんて出来るだろうか？　いや、出来るはずがない。
目の前に立って、ご対面しているだけでもかなり頑張っている方なんだから。
だから勿論、竜を直視する事が出来ません。
さっきはたまたま視線があったけど、それ以降私の視線は竜の顔ではなくその下、喉元辺りを彷徨ってる。
あの尖った歯とか変に想像してしまいそうだし、一度視線を合わすと今度は逸らす事が出来なくなりそうだから。
単純に私に度胸がないからというのもあるのだろうけど。
でも、未知の生物――竜という種族が分かっていてもその生態は謎なのだから、それは仕方ないと思うのよね。
なんて一人でうんうんと頷いていたら、竜に話しかけられてしまいました。

『先程から、一人で百面相をしているようだが……。何か考え事か？』

ひゃ、百面相ってちょっと酷くない？　しかもその言葉二回目よ、二回目！！
確かに色々と考え事はしていたけど、そこは実際そうだったとしてもオブラートに包んでやんわり言うなり、もしくはスルーするべきじゃないの？
女性――心は何時までも乙女ですが――なんだから、些細な事でも心は傷つきやすいのよ！！
思わずムッとして睨みつけそうになったけど、ハッとして慌てて表情を取り繕った。
相手は竜、竜だった。

ここで機嫌でも損ねて『パクリ』なんて事にでもなったら……。
危ない、危ない。
慎重にいかないとね。
とりあえず、訊ねられているから答えるべき、なのよね？
でも正直に考え事の内容を話すわけにはいかない。
それこそ、飛んで火に入る夏の虫よ。
何かないかな、上手い誤魔化しようは……。
えーっと、えーっと……。

「あ、あの、竜って言葉を話すんですね」

考えたわりに出てきたのはなんの捻りもない言葉だった。
あー、もうっ！！
もうちょっとマシな返答はなかったの！？
自分ながらに情けなく思う。
本当は『うがーっ！』って頭を掻き毟りたいけど、流石に今はそんな事をするわけにもいかないので、心の中で思いっきり地団駄を踏むに留めた。
心の中なので、実際効果は何もないのだけれどとりあえず気持ちだけでも。

『言葉を話す、か……』

感情が全く篭っていない声で呟いた竜に、あれ？　と思った。
もしかしなくても、失礼な事言った……？
ツーっと背中に嫌な汗が流れ落ちる。
『どう見ても言葉なんて喋るように見えませんよー。あはは』と解釈しようと思えば出来る、よね？
え？　まさか自爆しちゃった……？
私が一人内心であわあわしていると、再度竜に訊ねられた。

訊ねるという事は、今すぐ『パクリ』となるわけではないと思っていいのよね？
ううっ。
そうとでも思わないと会話なんか到底出来ない。

『竜に会うのは初めてか？』
「ええっと……」

私は返答に窮した。
初めてと言えば初めてだけど、ここは夢の中。――――現実の出来事ではない。
でもここで嘘をついたところで意味なんてないだろうし。
それに嘘をつく必要性も感じられない。

「初めて、です。絵とかでは見た事ありますけど……」

恐怖心がどうしても拭えないので、思わず敬語になってしまったけど素直に答えた。
本当はプラスしてテレビや映画でって付け加えようかとも思ったけど、通じないような気がしたので絵と濁した。

『そうか……。
我が眷属は、そこまで数が減っているのか……』

ん？　それって一体どういう事？
思わずといった感じで、ポツリと零された言葉に首を僅かに傾げてみたものの私の疑問に気付かなかったのか、それとも敢えて気付かないふりをしたのか……。
竜からはその事に関しての説明はなかった。
代わりに最初の問いに対する答えのようなものが返ってきた。

『なれば、我ら竜が言葉を解するという事を不思議に思っても仕方がなかろう。
一つ訂正させてもらうが、我らは言葉を話しているわけではない。直接汝らの頭に語りかけているのだ』
「直接頭に……？」
『そうだ。その証拠に、我の口は動いておらぬだろう？』

その言葉に、渋々ながら視線を上げて竜の口を見る。
僅かにしか視線は上がっていないけど、それでも視界の半分は竜の口で埋められていた。
これだけ見えていれば十分確認できる筈。
竜が言ったとおり確かに動いていない。――と言うより今は何も喋ってないから動いていないのは当たり前よね？
私の心の声が聞こえたのか、それとも視線に気付いたのか、竜が再び話しかけてきた。

『どうだ？　動いておらぬであろう？
我ら竜は、自身の思いを直接相手の頭の中へと送り込んで会話をしているのだ。
何せ我らの口では、人の韻を発する事は出来ないのでな』

確かに、竜の口は動いていなかった。
完全に、綺麗にピッタリと閉じられていた。
ならば竜の言うとおり、直接頭に話しかけてきているのだろう。
そうじゃないと説明つかない。
それにあの大きな口や歯では言葉を話すのは些か、いやかなり難しそうだし、声量もかなり大きなものとなる筈。
しかし直接頭に話しかけるって、テレパシーって事なのだろうか？
竜がいるぐらいだから、それぐらい出来たって不思議じゃないわよ

ね、うん。
それにしてもテレパシーって言うと、ファンタジー要素が極端に薄くなる気がする。
竜とテレパシーという単語の組み合わせが妙に可笑しくて、思わずクスリと笑みを一つ零した。

『ん……？　どうした？』
「いいえ、別に何でもないです」

竜の言葉に慌てて笑みを引っ込める。
そこでふとした疑問が浮かび上がった。
話しかけるのは直接頭にだとしても、会話の成立には言葉の理解が必要な筈。
そうなると、人の言葉を分かっていると言う事なのよね？
そういえばさっきそんな事をチラッと言っていた気がするけど、驚き要素が他の部分の方が強かった為、完全にスルーしちゃってた。
聞いても、いいのだろうか？
いきなり機嫌損ねて『パクリ』なんてやられないだろうか？
でも幾ら夢だといっても、気になる事はなるし。
ここまできたら、食べられても夢だと思って割り切るしかないか。
――間違いなく割り切れないと思うけど。

「あの、今更ながらに質問なのですが、いいですか？」

恐る恐る、竜の機嫌を窺いながら訊ねる。

『我で答えられる事ならば』

結構快諾をとれたんじゃないでしょうか？
これなら行き成り『パクリ』とやられる心配をしなくても大丈夫よ

ね？

「一応確認なのですが、あなた方竜族が話す言葉と私達人が話す言葉って違いますよね」

『無論。我ら竜族には竜独自の言葉が存在しておる』

「私が喋っているのは勿論人の言葉なのですが、解るんですよね？」

『ああ。少なくとも我は理解しているつもりだ。

現に汝と会話が成立しているので、問題ないと思うが？』

ちょっと機嫌を損ねている気がしないまでもないけど、気にせず一気に質問する。

本当に聞きたいのはここからだから。

「私は直接あなたの頭に話しかけるなんて芸当は出来ませんから、言葉をそのまま外に出しているわけなのですが、私の言葉は人の言語として聞こえていますよね？

そして直接語りかけられている言葉は、私は人の言語として認識していますが、竜の言語ではなく人の言語で話しかけているのですか？」

質問の仕方が下手で本当に申し訳ないと思うし、きっと取るに足らない質問だと思う。

それでも気になったものは仕方がない。

『要するに、汝が話、人の言語を我が耳で聞き理解し、人の言語で汝が頭に直接語りかけているのかを知りたいのだな？』

「はい」

迷いなくきっぱりと肯定する。

『そうか。ならばその問いに対する答えは是とも言えるし否とも言える』

肯定と否定。

そうなると、どちらかは正解でどちらかは不正解という事よね。

『汝ら人の言葉を我らの耳が確りと捉え、理解している。

しかし、語りかける言葉は我らの言葉とも、人の言葉とも言えない』

意識して話していないとなると、普通は自分がよく使う言語じゃないのだろうか？

『我らは思いをそのまま、思念を直接相手に送って会話を成立させている。思念を音声として外に出していない為、それが果たして言語と同じなのかどうか……。

我は思念と言語はまた別物だと、思う。未だ嘗てそのような事を考えた事がないのでな、それが正解かどうかは分からぬ。

だから今言える事は、我等が思念は言語であるかもしれない、だがそうでないかもしれない。

よって、『否』とさせてもらった』

そう言って申し訳なさそうな視線を送ってくる。

いや、送ってきていると思う。

相変わらず視線を合わす事はしていないので、雰囲気がそんな感じなのだ。

「あ、いえ。その……。こちらこそすみません」

なんとなく謝らないといけないような気になって、思わず謝って

しまった。

『何故謝る必要がある？』

「え、いや、あの……。なんとなく……」

『なんとなくで謝ってしまうほど、我の姿は恐ろしいか』

この状況で「はい」なんて肯定、誰が出来るというのだろうか。

「いいえ」なんて答えても明らかに嘘だと分かるだろうから迂闊に返答も出来やしない。

なので、無言回答とさせていただきました。

『初めて会うのだから、そう思われても仕方がないだろう』

私の無言回答にも特に気を悪くした様子もなく、それどころか苦笑と共にその言葉はもたらされた。

『……。話を戻そう。

我は先ほど『人の言葉を確りと捉え理解している』と言ったが、正確には汝の言葉は我の中で人の言葉としては認識されていない。

どう伝えればいいか、説明は難しいな。そうだな……。

我の耳が人の言葉を人の言葉としては捉えているが、その中身を頭で理解する頃には人の言葉という括りは既になくなっているという事だ』

脳が認識した頃には、既に竜の言葉に変換されているって事？

それって所謂、自動翻訳？

これもファンタジーのなせる業って事？

夢だからなんでもありっていえば、ありなのよね。

だったら、そんな真剣に私が思い悩む必要は無いって事か。

気になったから聞いただけなんだから、別にいいと言えばいいんだ

けど。
もっとスッパリ、キッパリ、竹を真っ二つに割るぐらいの勢いの回答を期待していただけに、ちょっと消化不良。
まぁ、夢だもんね、仕方ないよね。

◆3―4

「もういい加減、他の話題にしない？　俺、そろそろ飽きてきたし」

そんな飽きてきたといきなり言われても、他に話題なんて思いつかないし……。

竜との共通の話題なんかどう考えても浮かばない。

それなら自分から話題提供してくれたいいのではないかと思った私は、間違いではない筈だ。

「まぁさ、何話していいのか分からないってのは分かるけど、だからって延々と言語について話していてもつまらないだろ？

それとも何？　君って竜の生態か何か調べているわけ？　研究者か学者を目指しているの？」

いや、そういうわけでも・・・・・・。

ただ単に話題がないからそうなっただけであって。

第一私、そういうコツコツとした事性に合ってないし。

「仮になりたいとしても、竜はお勧めしないね。

こいつら頭凝り固まっていて、全くなーんの面白味もないからね。

どうせ研究するなら、うーんそうだなぁ……」

なんて考え込まれたわけなのですが……。

そんな事よりも、とても気になる事がある。

「あなた、誰？」

今更な質問な気もするけど、中々口を挟めるタイミングがなかったので仕方がない。
気が付いたらそこに、竜の右後方に一人の男の人が立って居たのだ。
違和感を全く感じさせず自然に会話に参加してきたから、漸く初めてその存在に気付いたのだ。
もしかしたら、私が竜に気をとられすぎて気付いていなかっただけかもしれないけど。

「あっれー？　気付いていなかった？　俺、最初から居たのに……」

首を傾げるオプションまで付けて、言ってくれました。
あー……。
やっぱり、竜に気をとられて気付いていないパターンだったか……。
申し訳ないと思うけどでも、それも仕方ないよね。
だって目の前に竜がいたのだもの。
どうしたって目の前の脅威に意識は行ってしまうから、他の事なんて気にしている余裕なんてないし。
なんて思わず自分自身に言い訳をしてしまったけど。
それよりもと、逸れそうになる思考をなんとか軌道修正し、男の人へと改めて意識を持っていく。

――身長は百八十センチ前後で、スラッとした細身体系。でも痩せているという印象は受けない。
所謂、モデル体系とでも言えばいいのだろうか。
ショートカットで襟足を少しだけ伸ばしたライトブラウンの髪は、癖もなく真っ直ぐストレートで指通りは滑らかそうに見えた。
ただ、フェルハントと比べると目の前の男の人が若干劣ると思う。
――贔屓目ではない、勿論。
顔の造詣はというと、その体躯から想像したとしても全く問題ないと言い切れるぐらい、期待を裏切らないものだった。

のっぺりとしたと良く表現される日本人の顔ではなく、彫が深いと一般的に評される西洋の顔立ちである。
スッと高く通った鼻筋に、不満を表現している唇は程よい肉厚を持っていて、どうしてか色香を感じてしまうのは艶のある唇の所為なのだろうか。
くっきりとしたラインの入っている切れ長の二重は、髪と同じライトブラウンの瞳だ。
その目はほんの少し垂れてしまっているが、逆にそれがいい感じに作用していた。
一瞬きつく見えてしまう顔も、その目のおかげできつさが幾分か緩和されている。
だからといって可愛いというわけではなく、間違いなくカッコイイ部類になるだろう。
そのままモデルや、芸能人になったとしても違和感は感じない。
頬から顎に向けてのシャープなラインは子供にはないもので、外見から推定するに二十代といったところだろうか。
ただ西洋の顔立ちは年齢の見極めが難しい為、それが本当に合っているかは本人に確認してみないとなんとも言えないけど。

「そんなに熱心に見つめられると、照れちゃうなぁ。
まぁ、俺に見惚れるのは仕方ないとは思うけどね～」

なんて一人でうんうんと頷いてくれちゃっているのですが。
確かにじっと見ていた私も悪いかもしれない。
でも、冗談として言っているというよりも本気にしか聞こえないのはどうしてなのだろうか。
もしかしなくても――――ナルシスト？
確かにこれだけの容姿だったら、そうなっても仕方ないかもしれないけど……。
でも今は、彼がナルシストだろうと、そうでなかろうとどっちでも

いい。
そんな事より、さっきの私の質問の回答は？
綺麗さっぱり、完全無視ですか？
答える気がないのか、もしくは全く聞いていないか……。
うーん…。
なんとなくだけど、後者の人の話を聞かないタイプのような気がする。
我が道を行く？　そんな感じのタイプ。
そうなると会話のキャッチボールは望めないかもしれない。
だからといってこのまま放置というのも、ねぇ？
まあ実際名前を告げられたからって、それからどうするというわけでもないのだけど。
じゃあなんで誰何を問うたかと言うと、完全な成り行きとしか言いようがない。
情けないことに。
でもきっと大半の人が私と同じような状況に陥れば、問いかけたと思う。
なんていうか……。会話の糸口よ、うん。そうよ。
だから誰何は必要な事で、そこから色々な話へと発展していくはず、なんだけど……。
初めから失敗しているこの状況では、この後どうすればいいのか何も思いつかない。
さてどうしようかと思わずため息を吐きそうになって、そういえばと視線を竜へと移した。

――瞬間、再度男へと視線を戻す。

えっと、何て言いましょうか……。
生命の危機を感じたとしか言いようがない。
急に無言になった竜の様子が気になって視線を向けた事を、心底後

悔した。
表情が乏しく、感情なんてきっと読み取り辛いだろうと思っていたのに。
先ほどチラリと見た竜の顔は怒りに染め上がっていた。
一体何故？
何時、どのタイミングで？
竜の機嫌を損ねるような行動も、会話もした記憶はない。
さっきまで普通だったのに。
ああ、ついにガブリと食べられるのか……。
半ば諦めの気持ちで覚悟するしかないかと思っていた私の頭に、突如響き渡った竜の声。
それは怒りを全く抑えるどころか憎しみまで感じさせられるものだった。
その声が私に向かって穿かれたものではないと分かっていても、自然と身体が震えだす。

『どうして貴様がここに居る。フィリップ・フラップよ』

竜は首を擡げると、剣呑な光を宿した瞳を後方に立っている男へと向ける。
男は突如動き出した竜を気にする事無くしかもその視線を真っ向から受け止めると、心底可笑しそうに口角を上げたのだった。

◆3―5

竜の問いかけに男は何も言葉を発しなかった。
ただ口角を僅かに上げ、何の感情も宿っていない視線を竜へと向けたままだ。
竜の方も、ピタリと視線を男に合わせたまま――――いや、そんな生易しいものではなかった。
そのまま視線で射殺せるのではないかと思うほど、殺気諸々を込めた物騒なきつい眼差しを向けていた。
二人――――いや一人と一頭だろうか。は、視線で十分会話が出来ているのではないのだろうかと思うほど、一切言葉を発しなかった。
それどころか、微塵も動かない。
この状態を言い表すとしたら、一触即発。
その言葉以外ないだろう。
少しでも動いたり喋ったりすると負けの様な……。
勿論そんな単純で生易しく軽いものはないのは、竜の雰囲気から嫌でも分かる。
二人の間には間違いなく、ピンッと張り詰めた糸が張ってあるのだろう。
息をするのも憚れる様な緊張感、緊迫感。
否応なしに私にもその緊張感が圧し掛かる。
部外者である私がこの緊張感を壊すわけにはいかないだろう。
それ以前に壊す勇気もないけれど。
おかげで意識しすぎて、自然に息が出来ない。
思わず、今までどうやって息をしていたのだろう何て考えてしまうほどだ。
どうして私がそんな気を遣わないといけないのか甚だ疑問に思うが、今のこの状況で文句なんか言える筈もなく。
それどころか、そんな事を言ったらすかさず竜に『パクリ』と食べ

られてしまうのがオチだろう。
それほどまでに竜の纏っている雰囲気が格段に危険レベルなのだ。
動けるものなら動いて、今すぐ速攻此処から立ち去りたい、いやいっそ消えてしまいたいと思うぐらい。
そんな事が出来るはずもないので、銅像や何かの置物のようにただ無言でじっとしているしかないのだ。
そういった状況なので、緊張感は未だに保たれたままの膠着状態。
一体どれ程の時間が過ぎたのだろうかと、頭の片隅で考える。
只管じっとして何もする事のない時間がどれ程無意味で、苦痛なのか分かっているのだろうか。
いや、分かっていたらこの緊張感は続かないだろう。早々に何かしらのアクションが起こり、状況は変わっていた筈だ。
それがどういった事を引き起こすのかは分からないが。
それでも、いい加減どうにかしてくれないだろうかと心底思う。
残念ながら自分から何とかする勇気なんてないので――だって普通の平凡で非力な女性がどうして竜に物申せようか。勿論知らない男の人に話しかけるのは論外。
だって、竜の知り合いだ。見た目通りとは限らないだろう。
出来ればどちらかが、それが無理なら第三者の誰かが何とかしてくれないだろうか。
他力本願、なんて言う事なかれ。
どう考えたってこの状況を打破するには、私には荷が勝ちすぎているのだ。
内心で疲れたため息を吐きつつ、動けー、動けーと意味がないだろうと思いつつも念を二人に送る。
こうでもしていないと、暇を潰せない。
それにあれだ。
石に立つ矢とも言うではないか。
頑張れば、諦めなければ出来ない事はないのだ。うん。
なんて自分を弁解している時点で、すでに限界なのよね。

もう本当に、どっちでもいいからこの状況を何とかして！！
私の何度目か分からない心からの叫び。
それがようやく届いたようだ。

『再度問おう。フィリップ・フラップよ。どうしてお前が此処に居る』

理性でもって自分の感情を押さえ込んでいるのだろう。
頭に直接響く竜の思念――言葉は纏っている雰囲気からは想像できないほど、怒気を孕んでいなかった。
いや、そう思いたかっただけかもしれない。
その言葉の根底にある、理性で押さえきれていない感情が僅かに漏れ出ていたようだ。
それは酷く冷たく背筋がゾクリと、いや本能が危機感を感じてか思わず全身が小刻みに震えだすほどだった。
竜が感情を全て開放した時、その先に待っているのは……。
駄目だ駄目だ。
慌ててその思考を振り落とす。
これ以上、竜の感情に意識を向けていれば間違いなく碌な事にならない。
僅かに漏れ出た感情でさえ、この様な事になっているのだから。
とりあえず意識を何かに向けていないと。
えーと……。
なんて考えたところで、動けやしないのだから自ずと意識を向けるのは決まってくる。
残念な事に――目の前の二人以外にない。
もう少しこの緊張感が緩まれば、こっそりとこの場を離れられるとは思うのだけれど……。

「まさか竜如きの結界を、この俺が越えられないと？」

男は漸く口を開いたのだが、その内容はあまりにも酷かった。
ついでに鼻で哂うというオプション付きだ。
一体なんて事を言うのよ！　空気読んでよ、空気！　と、声に出す勇気はないので心の中で男に怒鳴る。
予想通りというか、当たり前だと言うべきか、竜の殺気がぐぐぐんと格段に膨れ上がった。
しかし男は一向に気にした様子はない。
まるでどこ吹く風のようだ。
なんていう図太い神経！！
竜が醸し出している殺伐とした雰囲気を物ともせず、自分を押し通す。
その無謀ともいえる勇気、中々出来る事ではない。
ある意味賞賛に値するだろう。
でも、それは二人だけの時にしてもらいたい。
此処には全く関係ない、第三者――私が居るのだ。
それを念頭において発言なり行動なりをしてほしい。
巻き添えなんて喰らいたくないのだ。
何度も言うようだが、私は極々一般の平凡で非力な女性だ。
そんな私が竜の殺気を肌で感じて、平然と出来る筈なんかない。
自分に向けられているわけでないと分かっていたって、本能は否応なしに警鐘を鳴らす。
鳴らしているなんてかわいらしいものではない。
例えて言うなら壊れたベル。
止まる事を知らないとでもいうように、大きく只管けたたましく鳴り響いている。そんな感じだ。
頭の片隅には『死』という言葉が常駐し、気を抜くとすぐに身体は震え出そうとする。
その震えをなんとか表に出さずに、気力を振り絞って頑張っているというのに……。

私の涙ぐましい努力をふいにするかのような男の言葉に、沸々と怒りが湧いてくる。
だから悪態付かれたって仕方がない。いや、当然だろう。
文句なんて勿論言わせない。
でも男に対する怒りのおかげで、身体の震えは若干収まった。
その点に関しだけは、お礼を言ってあげてもいいかもしれない。

『我等の結界が、貴様にとっては意味のない事ぐらい知っている。
我が尋ねたいのは別の事よ』

あれだけ殺気を放っていたのに、それでも会話をしようと話しかける竜は凄いと思う。
私だったら完全に無視するわね。
気になるけど、それよりも感情が勝って口をきくのも嫌だと思う。
きっと竜は私より遥かに心が広く、精神年齢が大人なのだろう。

「ふうん。プライドは高いと思ったんだけどな。
で？　何を聞きたいわけ？」

どうやら今回は会話になりそうである。
男の言葉に、ホッと胸を撫で下ろした。
良かった良かった。
後はもう少し雰囲気が軽くなったところで、こっそりと此処から離れられれば言う事ないのだけど。

『此処には貴様の興味が惹かれるようなもの等一切ない筈だが、どうして此処に居る』
「まあ確かに。竜の住処になんか興味は全くないけど。
でも、今此処にしかないものがあるだろう？」
『此処にしかないものだと？　そんなもの一体……』

考えに集中しだしたのか、竜の言葉はそこで途切れた。
視線は虚空を何所とはなく彷徨っている。その瞳には本当の意味では何も映っていないだろう。
男は相変わらずニヤニヤと、底意地の悪そうな表情で竜を見ていた。
よーし、今がチャンス！
竜は自身の考えに没頭しているし、男は竜を見ているから私は視界に入っていない。
そろーりそろーりと後退して行く。
さすがに行き成り方向転換をしては、気付かれてしまう可能性があるからだ。
そうして地道に距離をある程度稼いだところで何故か、竜と目が合ってしまった。
何故にこのタイミング！？
仕方がないので、竜の視線が外れるまでその場でジッとしている事にした。
視線が外れたらまたこっそりと後退しようと考えて、竜の視線が外れるのを待っていたのだが不思議な事に一向に外れる気配がない。
まさか後退していたのがばれたとか？
でも、ばれた所で竜の怒りを買うとは思えないのだけど……。
ならば何故、食い入るような目で見られているのだろうか。
全く持って見当が付かない。
せめて何か話しかけてくれでもしたらいいのだけど。
そんな無言の見つめ合いを、どれ程の時間していたのだろうか。
正直なところ、時間に気を配る余裕などなかったので短かったのか、それとも長かったのかは分からない。

『まさか……』

思い当たる何かがあったのか、竜が誰ともなしにポツリと呟いた。

視線は相変わらず私に合わせたままで。
その呟きを男が拾った。

「その『まさか』だよ」

男はそこで一旦言葉を切り、視線を竜から私へと移した。
なぜか行き成り二人の視線を真っ向から受ける事になったのだけど、
相変わらず理由が分からない。
それなのに嫌な予感しかしないのは何故だろう。
そしてそれと同時に、本能の警鐘もさらに激しくなってきた。
これって本気で生命の危機？
形振りかまわずダッシュで逃げた方がいいのかもしれない。
そうだ、そうしよう！
瞬時に決断すると、勢いよく回れ右をして走り出した。
自分の持てる力を全て振り絞って、ただ只管足を前へ前へと踏み出
していく。
こんな事前にもあったような気がしたな、と一瞬意識をそらした瞬
間、何かにぶち当たった。
結果、自ずと立ち止まるしかない。
スピードが出ていた筈なのに、弾かれなかった事を不思議に思いつ
つもそのぶち当たったもの――障害物へと視線を向けた。
思わず数度、瞬きをしてしまった。
ついでに何回か目も擦ってみた。
さらに、瞼の上も指でぐりぐりとほぐしてみた。
それでも見えたものは、全く同じで変わらなかった。
ならばこれは幻ではないのだろう。
そこには――後ろに居たはずの男が立っていたのだ。
そんな馬鹿な……。
走っていたつもりで走っていなかった？
いや、そんな事はない。

現に後ろを振り返ってみれば、竜との距離は空いていた。
ならこの男が私より速いスピードで走って先回りして立ち止まっていた？
いや、それもない。
さっき一瞬意識をそらしただけで、それ以外は前を向いて走っていのだ。
幾ら男のスピードが速くても私の視界の中に入っていただろう。
だったら男はどうやって……？

「あー。一人で考えてるところ悪いんだけど、とりあえずこっちに意識と身体向けてくれる？
折角君に会いに来たんだしさ。ねぇ、聞いてる？」

何か今、聞き捨てならない言葉が。
いや、幻聴、幻聴だうん。

「わー。完全無視？　何そのスキル。でも、俺めげないよ」

そうだ。このまま何事もなかったようにこの場を去ろう、そうしよう。
間違いなくそれが一番いい。
そうして歩き出そうとしたのだが、肩を掴まれて強引に身体の向きを変えさせられた。
ぐりんって音が聞こえそうなほど勢いよく身体を反転させられた先には、男の顔がすぐ目の前にあった。
って、顔！？
滅茶苦茶近いんですけどっ！？

「別に、無視しててもいいけど？　それならそれで一日中俺の事しか考えられなくしてあげるし？

それどころか、俺なしでは生きていけないようにしてあげるよ。
あ、なんかそれいいかもしれない！　ねぇ、そう思うだろ？」

お互いの息がかかる距離で、愉悦の笑顔で告げられたって同意なんか全く出来ません！
何その危険な思考。
迷惑以外の何者でもない。
そんな思考、まとめて燃えるごみの日にでも出してしまえ！

「反応がないって言う事は、同意って事だよね。
そっかそっか、そんなに俺と一緒に居たいんだ。
やー、なんて言うの？　俺の魅力にメロメロ？　骨抜きにされちゃったって事かな」
「メロメロでもないし、骨抜きになんかされてませんっ！！
っていうか、いい加減に離れて欲しいんですけどっ！！」

あのまま無言を押し通していたら、間違いなく好ましくない方へと行くのは分かっていたので仕方なく返事をした。
ついでに断固拒否の構えをとる。
男は私の拒否の言葉にやれやれと肩を竦めると、一歩後ろへと下がった。
それでも、相変わらず顔には笑顔が張り付いていたが。

「そっか。残念。
まぁ、何にしても俺は君に会いに来たんだよ。
椎名結歌（しいなゆいか）――――君にね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4569k/

誰が為のoverture

2011年2月7日13時45分発行